
すきでいてもいいですか

円藤杷菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すきでいてもいいですか

【Nコード】

N7353U

【作者名】

円藤杷菜

【あらすじ】

自分のせいで昏睡状態に陥ってしまった先輩兼、彼氏。彼は最後にこう言った。俺を忘れて、幸せになれ。できるわけ、ないのに。すきでいることさえも許されないの？ ねえ、先輩。私はまだあなたをすきでいてもいいですか？

人物紹介

203号室 遠藤 千早 (えんどう ちはや)

写真好きで、飯塚の彼女。写真部に所属している。K大健康科学部二年。

ニックネームは遠藤、千早。

104号室 飯塚 龍之介 (いづか りゅうのすけ)

料理好きで、千早の彼氏。K大健康科学部三年。

ニックネームは飯塚、リュウ。

105号室 真山 誠司 (まやま せいじ)

運動好きで、陸上部の主将。人気が高いが彼女はいない、K大健康科学部三年。

ニックネームは真山、誠司、セージ。

101号室 上村 健太 (うえむら けんた)

ラーメン好きの女たらし。常にハイテンション。K大健康科学部二年。

ニックネームは上村、健太。

102号室 江藤 孝介 (えとう こうすけ)

しつかり者の弟分。健太曰くヘタレらしい。K大教育学部一年。

ニックネームは江藤、孝介、孝ちゃん

201号室 桐島 由利 (きりしま ゆり)

ホラーやオカルト系が嫌い。K大健康科学部二年。

ニックネームは桐島、由利。

204号室 金城 雅 (かねしろ みやび)

口調が独特でお堅い頭。賢い。K大教育学部三年。
ニックネームは金城、雅

206号室 宮村 玲奈 (みやむら れな)

おっとりとした可愛い女の子。写真部でK大教育学部二年。
ニックネームは宮村、玲奈。

「約束の日だったただけなんで」

空を見上げると、もう既に真っ赤な夕焼け。小さくため息を吐いて、歩きだす。時間はたんとあつたはずなのに、過ぎていくのなんてあつという間。

ケータイを見ると、驚くほどたくさん着信があつた。それはみんな、同じ学生マンションに住んでいる人たちからだった。

《いまどこ!?》

《みんな心配してるぞ》

《見たら返信してくれ》

心配なんて、そんなの必要ないのに。そう苦笑して、電話帳から迷わず1件を引き出して発信ボタンを押す。相変わらず赤い夕焼けが、やけに腹立たしかった。

「あ、もしもし。千早です」

さらりと名前を言えば、向こうから焦ったような声が聞こえる。

聞こえているのに、理解できない時がある。最近はいつもこうだ。会話や文章が、聞こえていても頭に入らな来ない。そんな時がたまにある。

『千早! いま、どこにいるの。帰って来ないから心配したでしょ!』

学生マンションとは言え、蓋を開けてみれば単なる寮と変わらない。12この部屋がある中で、入室している部屋は9つ……いや、8つ、かな。

人数が少ないからか、他の学生マンションと比べてみんな仲が良いみんな、お互いの部屋を行き来するのは当たり前のこと。

「……ごめんね、由利。いま神社にいるんだ」

ちら、と横目で大きな御神木を見た。ジャングルとシーソー、ベランダのあるマンション近くの神社。そこに、私はぶらぶらと訪れていた。

由利はしばらく何も言わなくなったあと、小さく息を吐く声が聞こえた。後ろが賑わっているということは、みんなが集まっているのかもしれない。

『ちよつと真山先輩……！ あ、ああー！』

見なくても、由利が顔を歪めているのは声色でわかる。そして真山先輩が、何をしたのかもわかってしまった。仕方なく、近くのベランダに静かに座った。

『ごめん、真山先輩が』

「うん、わかっちゃった。由利は悪くないよ、大丈夫」

本当なら、ここには1人で来たりしないのに。いつもの散歩ルートだけど、あたしの隣にはいつも人がいた。いつも、隣で無愛想だけど優しい人がいた。

もう、いないけど。

小さく自嘲して、由利に真山先輩を待つと言ってから通話を終わらせた。私と同様に黙り込んだケータイはポケットに突っ込んだ。空を見上げれば、もう暗くなっていて。泣きそうになった。

「……飯塚先輩、」

そう小さく呟いた名前の人物は、もう側にいないのに。いつまでもすがつている自分が情けない。もう、飯塚先輩は前の人だって言うのに。忘れられないの、まだ。

ザツ、ザツと走る音が聞こえて立ち上がる。神社の鳥居をくぐって階段を下りると、汗を流して息を切らす真山先輩がいた。予想以上に早かった。

「真山先輩、早いですね。 さすが陸上部のキャプテン」
「ばか、早く帰るぞ」

心配してくれていたことはわかっている。自分が、まだしっかりと割り切れていないことも。真山先輩が、やけに私に構う理由も。ちゃんとわかっている。

からかうようにそう言ってから、真山先輩の隣に並ぶ。汗を拭いながら、真山先輩は顔を歪めていたけれど。私が口を開かなかつたら、彼も何も言わなかった。

「……リュウのこと、まだ、受け入れてないのか」

苦虫でも噛み潰したのかというような顔で、気まずそうに言った。言わないようにしていたわけじゃなくて、言うタイミングを見計らっていたのかもしれない。

……飯塚龍之介先輩。

私の大好きな人で、それでいて大切な人。飯塚先輩だって、私を大切にしてくれていた。

はは、と笑ってみせれば、真山先輩は目を大きく見開いて私を見た。そんな驚くことつてある？ 自分で聞いたクセに。

「大丈夫ですよ。今日は、約束の日だっただけなんで」

それだけ言えば、真山先輩は首を傾げた。そう、今日は飯塚先輩との大切な約束の日だった。

「どこに行くかっていうのは、先輩に任せつきりだったんですけどね。二人で、出掛けようつて……約束してたんです」

じゃあ、その日は絶対にバイトは入れませんねって言った。先輩も笑いながら、当たり前だって答えてくれた。懐かしいですね、先輩。

いつでもカメラを持って出掛けて、いつも空ばかり撮ってた。いま思えば、先輩を撮っておけばよかった。レンズ向けても、笑ってくれないんだろうけれど。

先輩。私、いま、後悔しか思い付かない。ああすれば、こうすれば、って。もう叶わないのよね。あの時にしたかったことが、いまになって思い浮かぶ。

「……そうか。いや、それならいいんだ」

傷付いているのは、真山先輩だって同じなのに。飯塚先輩と一番仲良しで、親友で、双子みたいだったから。きっと私よりも付き合いの長くて深い、真山先輩の方が辛い。

「カメラ、好きだな」

「はい。写真部ですし」

頑張つてバイト代で買った一眼レフ。それでも、こいつは一番果たして欲しい役目をもつ果たせない。きっと、この先の、人生の転機になるまでは。

飯塚先輩が戻らない限り、もう絶対に果たすことはない。あれから、寮に着くまでの十分足らずの時間は、ずっと無言だった。でもそれが大した苦痛でもないのは、真山先輩が普段から口数が多いタイプではないからだろうか。

「じゃあ、真山先輩、ありがとございました」

頭を下げれば、自分の茶色い髪がちらりと見えた。さほど長くはないが、持ち上げてポニーテールにしている。それは、以前に飯塚先輩が好きだと言ってくれた髪型で。

真山先輩は、黒。真つ黒の短髪で、いかにもスポーツマンといった風貌だ。それとは逆に、飯塚先輩の髪は長めで色素の薄い黒。似ているようで、違った。

「ああ。……ちゃんとメシ、食べよ」

優しく微笑んで、真山先輩は部屋へと消えて行った。真山先輩の隣の部屋が、飯塚先輩の部屋。私が、よく通っていた場所。いまはもう、届かない場所に部屋があるような気がする。

「また明日な、遠藤」

「……はい、また明日」

小さく笑ってみせると、真山先輩は一瞬、悲しそうな顔をした。仕方のないことだつてわかっている。だって、私が不安定なのをわかっているだろうから。

《また明日》と言うのは、きっと私が飯塚先輩の後を追わないため

の牽制。仕方ないよね、私がボロボロなのを真山先輩はわかって
いる。
他の人もわかっているだろうけれど、みんなは私が強いと思っ
てはるはずだ。だから、私がここまで追い詰められていることを知ら
ない。真山先輩以外は。

「……また、今日も1日が終わりましたよ、飯塚先輩」

死んだわけじゃない。ただちょっと、昏睡状態になってしまっ
ているだけ。元々、体の弱い人だったけれど。昏睡状態に陥った理由
に、それは全く関係なかった。

「生きてえな」

猟奇的事件、とでも言えばいいのだろうか。

あの日、飯塚先輩といたのは私だけではなかった。学生マンションの、ほぼ全員。みんな一緒にいた。晩ご飯を食べに出掛けた、直後の話だった。

帰り際で私たちは、各々の赴くがまま歩いていた。もちろん、私は飯塚先輩と。先輩の隣には真山先輩。前には、他のみんな。

「相変わらず、このメンバーだといつもラーメンになりますよね」
「はは、いいじゃないか」

真山先輩は笑う。

飯塚先輩は隣でしかめ面をしながら、私の頭を撫でた。それから真山先輩を睨むように一瞥して、深いため息を漏らす。そんなのはいつものことだった。

「体に悪いっつー話をしてんだろっつが。セージはスポーツしてんならちよっとくらい、メシに気い遣え!」

こっつやって、口が悪くても真山先輩を気遣っているのも、好きだった。料理上手な先輩はいつだって、人の体調管理とか食生活を気にしている、優しい人だった。

「ならそれ、健太に言った方が早いですよ。いつも健太が決めるんですから」

こんなことばかり話していて、でもそれが当たり前前の日常で。

この世界がなくなる日なんて、私は一度も考えたことがなかった。
……考えたくもなかった。

飯塚先輩が私を見る目も、触れる手も、口が悪いけど優しい言葉も、全部全部……一生続くものだと思っていた。なくなることはない、どこかで確定してしまっていた。

じゃあ次は飯塚先輩の手料理ですね、なんておどけて。そんな私を、飯塚先輩が小突く。それを見ていた真山先輩は、どこか楽しそうに笑っている。それが日常で、いつも同じ風景だった。

「帰っても8時ですね」

「そうだな。どこか寄って行くのか、アイツら」

「行くんじゃないのか。いつもそうだよ」

場所は大通りだった。人は多くて、電灯の並ぶ明るい通り。そこは普段通りの賑わいと明るさを維持していた。何ら変わりのない、いつも通りの土曜日の夜。

そしてそれは、ほんの一瞬で嘘だったかのように消え去った。

どこからか、悲鳴が聞こえて。またどこかで喧嘩でもあったのだろうか、気にも止めなかった。もちろん、飯塚先輩も真山先輩も同じで歩き続ける。もう前にいたメンバーが見えない。

でも、違った。

再び悲鳴がして、近くでドサリと何かが倒れる音。振り返れば、3メートルほど後ろで倒れている、人。血まみれで、その人の後ろにも数人倒れていた。

走って逃げていく人を眺めている、刃物を持って帽子を深く被った男がいた。ガタイがいいから男だというのは確証があって、隣で飯塚先輩が舌打ちをした。

「俺らも逃げんぞ」

私の腕を掴んで走り出す。もちろん、真山先輩も一緒に走り出した。スポーツマンの真山先輩は速くて、追いつくのも一苦労で。

しかもその日はブーツ。走るのには不向きだった。

すてん、と派手に転んだ。私の腕を掴んでいた飯塚先輩の足も同時に止まる。後ろから走って来る音が聞こえる。一つだけ。

隣で、また小さな舌打ちが聞こえた。それと同時に、温かい重みを感じた。

ドツ、と鈍い音がして、視線を上げれば無表情な男が立っていた。その手に、刃物はない。まさか。背中に冷や汗が流れて、嫌な予感がした。

「……せ、んぱい……？」

私にもたれかかる体が、やけに重いのは気のせいだと思った。腹部がやけに温かいのも、何かで濡れている気がするのも、全部、気のせいだと思った。

「リュウ！」

先を走っていた真山先輩が慌てて戻って来る。近くにいるはずなのに、それはどこか遠くでした声のような気がした。男はニヤ、と気持ち悪く笑って先輩の背中に手を伸ばす。

やだ。やめて。

「……っ、う」

先輩が、小さく唸った。それと同時に、私の服がどんどん濡れていくという感触が広がる。男は隙をつかれ、他の人たちに取り押さ

えられた。

私を抱き締める力は、すごく弱かった。いつも通りなんかじゃなかった。

「や、やだっ、先輩！ 目、閉じないで！ やだあっ！」

さすがのように、先輩の背中に手を回した。どこかから、救急車のけたたましいサイレンが聞こえる。何台も、何台も、走って来たらしい。

ボロボロと涙が溢れてきて、先輩の肩口を濡らす。力なく私にもたれている先輩が、同じように力なく笑った。

「ば、かやる……泣くなよ。笑っ…とけ、ちはや」

やだ、やだと繰り返す私に困ったような先輩。その顔は血の気の無い、真っ白な顔をしていた。

お願い、死なないで。隣にいてください。2人の時しか名前と呼ばなかったのに、いま呼ぶと。もう、お別れのような錯覚に陥る。

「……………セー、ジ」

先輩の腹部を押さえていた真山先輩が、顔をあげる。真山先輩の顔も、血の気がなくなっているように思えた。

「千早、のこと、頼む……………」

「っ、それは！ お前の仕事だろ、リュウー！」

叫んだ声に、先輩は弱々しく首を横に振った。

「セージのこと頼む、な」

「やだ……やだあつ！」

握った先輩の手はもう、冷たかった。

ガバツと起き上がると、自分のパジャマがぐっしより濡れていた。あの出来事は、私を責めるように何度も何度も夢に出て来る。

あの時、私が転ばなかったら。飯塚先輩が、刺されてしまうこともなかっただろう。全部、私のせいだ。先輩は、私を庇ったせいで刺されてしまった。

「……………つ、う」

私が刺されていればよかったのに、と何度も思った。それなら“自業自得”だったのに。それなのに、被害に合ったのは先輩で、私じゃない。

真山先輩は、飯塚先輩に言われた通りに私のことを見守ってくれている。彼は《リュウが帰って来るまでは、俺で我慢してくれ》と言っていたけれど。

真山先輩は、私を恨んでいないんですか？

聞きたくても、聞けない。自分の親友で、双子のような人を奪った女を。彼は文句も言わずに見守ってくれている。詰ることも、罵ることすらもない。それが逆に、苦痛なのに。

「……………水、」

やけに喉が渴いた。そのせいなのか、声が掠れる。息苦しくて、

またあの記憶が鮮明に蘇ってくる。あの時も、これくらい息苦しかった。

救急車の中で、先輩は私の手をしっかりと握っていた。いつもよりも弱くて、今にもほどけてしまいそうな力が、頼りなかった。

「生きてえな」

ハッキリと聞こえた。

でも、その声はどんどん弱くなっていく。ずっと、ずっと私の名前をうわ言のように読んでいた。そして、最後の力を振り絞るように言った。

《俺を忘れて、幸せになれ》

なれるわけがないのに。先輩がいなくて、私が幸せになれるはずがないのに。お願いだから、そんなこと言わないで欲しかった。まるで、好きでいるのがダメみたいな呪縛。

その言葉を最後に、先輩は昏睡状態に陥った。血まみれのまま、私たちは病院の治療室の前で放心していた。自分の至る箇所に血がついていても、そんなの気にならなかった。

それよりも、治療室に駆け込みたくて、不安だった。先輩に会いたくて、会って、謝って、ただお礼が言いたかっただけだった。真っ赤な治療室の電気が、憎かった。

それでも同じように血まみれの真山先輩が、私を落ち着かせようと手を握ってくれていたから。だからまだ、平常心を保っていられた

のかもしれない。

「大丈夫、大丈夫だ。リュウが死ぬわけ、ない」

まるで私じゃなくて、自分に言い聞かせるように真山先輩は言っていた。何も言葉を返すことなく、ただじつと治療室のランプを睨んでいた。

パツと治療室の真つ赤なランプの灯りが消えた。それとほぼ同時に立ち上がると、ふらついた体を真山先輩は肩を持って支えてくれた。

「一命は取り留めました。ですが、目覚めるかどうか……保証はできません」

「……それって、」

「非常に申し上げにくいのですが、昏睡状態が続くかと思われま

言葉が出なかった。

そんな私に対して、真山先輩は果敢に先生に立ち向かう。まるで噛み付くみたいな物言いに、先生は酷く困った顔をして眉を下げた。

「その昏睡状態は、いつまで続くんですか!」

怖かった。先輩は生きているっていうのに、悲しかった。起きないなんて、嘘だと言って欲しかった。いつ退院できますよって言うてくれると思っていたのに。

違うんだ。先輩は、生きているけど目を覚ますことはないんだって。信じたくなんて、なかった。こんな事実。

「良くても時間がかかるでしょう。……最悪、このままだということも……」

目の前が真っ暗になった。プツン、とそこで自分の頭の中のモニターが途切れた。

あれから、毎日のように病院に通っている。それは先輩の様子を見に行くためであって、私と真山先輩の私用でもある。

あの日、警察と病院からの勧めで精神科に通うように言われた。目の前で大切な人が刺されたというダメージは、自分が思っている以上に大きいらしい。大丈夫だと断ったのだが、心が悲鳴をあげる前に、と言われてしまった。

「今日も、かな」

ベッドサイドにあるカレンダーに指を滑らせて、今日を確認する。あの事件から、1週間。まだまだ傷が癒えることはない。でも、笑っていないと先輩が心配するから。

確認を済ませてから、もう一度ベッドに滑り込む。朝になったら、真山先輩にメールでもしておこう。どうせ、明日は休校だ。昼までゆっくりしたい。

気だるいような感覚に襲われて、まるで堕ちるかのように眠りについた。

「どこか出かけるか？」

ピピピピ……という目覚ましのアラームが、頭に響く。たくさん眠ったという感覚はないが、眠いという感覚もない。ここ1週間はずっとこんな風だ。

チカチカ光るケータイ。見てみれば、いつから着信していたのかディスプレイに《真山誠司》の四文字。私の電話帳は、すべてフルネームで登録してある。

《今日、病院だな。休校だからどこか出かけるか？》

知っている。真山先輩、飯塚先輩がいなくなったから寂しいんだ。だから、余計に私に構ってくれる。

時計を見れば、九時。

よし、と意気込んで返信メールの作成画面を作った。そして、考えた文章をどんどん打ち込んでいく。送信。受信。送信を繰り返す。

《そうですね！ お昼ご飯、一緒に食べましょう》

《十一時に、エントランスで大丈夫か？》

《わかりました。また後で》

《また後で》

良く言えば、支え合っている。悪く言えば、傷を舐め合っている。お互いが、大切な人をなくした。生きていても目覚めない絶望感。わかりあえるのは、二人だけだった。

だからこうして、2人でのいるのだろう。自分のことだからこそ、よくわかる。真山先輩と二人だけど、飯塚先輩には悪いと思わない。だって、私たちの間にはいつだって恋愛感情はないから。

もう九月の中旬で、そろそろ薄着でいるのは辛い。服装は適当に

選んで、お気に入りのパーカーを羽織った。

週三くらいで精神科に通っているせいか、真山先輩と出かけることにも抵抗がない。むしろ、飯塚先輩がいた時から私たちは変わってないような気がするほどだ。

「……お昼、真山先輩と一緒にお見舞い行きますね。待つてください」

部屋の戸締まりをきっちりしたあと、部屋の机の上にあったネットクレスをした。それは、私が誕生日の日に先輩がくれたもの。私の宝物だ。

それをつけながら、ケータイに向かって言った。ディスプレイには、料理をする先輩の写真。ちなみに、隠し撮り。一眼では撮らなかったけど、ケータイには残っていた。

「あ、でも私と真山先輩も診察だから夕方かな？ できるだけ、早く行きますね」

一度でも話し出すと止まらない。先輩を見てしまうと、話したいことが話せなくなってしまうから。だからいま、話したいことがたくさんあるのかもしれない。

いま、先輩を見ると泣きそうになっちゃうから。

「何か欲しいものありますか？ って言っても、花は要らなさそうですね……っと、時間だ。じゃあ、また後で」

鏡で一通り確認したあと、ケータイを閉じてカバンの中に無造作に入れた。時間は約束の五分前。そろそろ、とショートブーツを履いて家を出た。それから真山先輩と向かったのは、病院の近くにあるショッピングモール。とりあえずお昼ご飯、ということらしい。

そのあとで本屋に寄ってから、病院に向かう。もう予約は取れていた。

「遠藤、何食いたい？」

何って言うほど、食べたいものはない。ただ、1つだけ避けたいことはあった。

「がつつりは無理ですね」

「……体調、悪いのか」

苦々しげに、真山先輩は顔を歪めた。そんなに大したことじゃないけれど、最近は胃の調子が悪い。簡潔にそう答えれば、真山先輩は重苦しいため息を漏らした。

それから1階のフードコートと、3階のレストラン街のお店を見比べる。真山先輩はしばらく案内板を見たあと、私を振り返って問う。ファミレスか、ファーストフードか。

「うーん……真山先輩は？ 意見言っていないですよね」

ぱっと思いついて、この判断を真山先輩に委ねようと思った。

だが、真山先輩はちょっと目を見開いたあとで目を細めて笑った。無骨な、ゴツゴツした手で私の頭を撫でた。

「俺は何でもいいんだが……ファーストフードにするか。そっちの方が、野菜とかで食べやすいだろ」

ハンバーガーじゃなくて、サンドイッチのファーストフード店。店の中で好きなものを注文して、私は席を取りに行った。

しばらくもすれば、トレイを持った真山先輩が来た。ありがとうこ

ざいます、と言えば彼は穏やかに笑う。ここは、真山先輩の奢りになつた。

私だつてバイトしているから出すのに、と考えたが、あまり噛み付くのもどうかと思つて甘んじて受け入れた。真山先輩の好意を、素直に受け止めようと思つた。

普通の女の子だと、ファーストフードは嫌がるのだろうか。きつと、由利や玲奈は無理だつて言うんだろつな。そう思いながら、サンドイッチにかぶりつく。

相手が例え飯塚先輩であつても、私がこういうことを気にすることはない。だから、真山先輩の前だとなおさら気にすることはない。こつこつサバサバしたスタンスは、絶対に崩さない。

「食えなかつたら残せよ。食事は無理して詰め込むものじゃないからな」

もごもごと口の中に入ったパンを消化しながら、数回、適当に頷いておいた。真山先輩は呆れた顔をしながらも、自分のサンドイッチをばくりと食べた。

飯塚先輩はかっこいいけれど、見た目が怖いから、近寄る女の子はほとんどいなかった。私になついた時は周りから散々「物好きだな」と言われたものだ。それほど、女づきがなかった。

それに反して真山先輩は。飯塚先輩と対照的に、すごく人気がある。それは端正な顔立ちをしているからと、陸上部の主将だという理由も少なからずあるだろう。確かに、走っている時の真山先輩は本当にかっこいい。

ただ、ミーハーな女の子たちに言い寄られて、真山先輩は迷惑じゃないのかな、と思う今日この頃。あんまり突っ込むと悪いので、そつこつ込み入つたことを話したことはないのだが。

「このあとは本屋に寄つてから病院だな」

「はい。……あ、真山先輩、この前に新しいシューズの話、してませんでした?」

「ああ、あれか。いいんだ、次の大会が終わってからで」

ふうん、と呟いてまたばかりとサンドイッチを食べた。私も小学校から高校までバレーボールをやっていたから、なんとなく気持ちはわかる。

新しいシューズは慣れるまでにそれ相応の時間がかかるから、大会が終わってからが一番いいのだろうと思った。

学生マンションのみんなとは、大学から知り合った。由利、玲奈、健太、私が同期で同じ年の二年。江藤くんが一つ下で一年生。そして飯塚先輩、真山先輩、雅先輩が一つ上の三年生。

私たちが入居したとき、既に先輩たちがいた。由利と健太は学科が同じで仲良くなって、玲奈は私と一緒に写真部に入ったから、そこから仲良くなった。

飯塚先輩はいつも1匹狼のようで、私は最初から気になっていた。声をかけても、あまり話してくれなくて。放つといってくれ、というオーラがひしひしと感じられた。

それでも、自分でも不思議なくらい、この人と仲良くなりたかった。まだ、恋愛感情なんてなくて。ただ、先輩につきかかることが楽しかった。

…突っかかる度に見える心配性で優しい彼が、やけに愛しく思えた。

「遠藤? 大丈夫か?」

はっとして顔を上げると、真山先輩が眉を寄せていた。自分がトリップしていたことに気付き、こくりと頷いた。それから小さく謝

ると、頭を撫でてくれる。

私にとって真山先輩とは、どのような存在か。そう聞かれたらハッキリと答えられる。いい兄貴分だと。

「……ちよつと、思い出に耽つてみたいですよ」

そう伝えれば、彼は仕方ないとも言いたげな顔をして笑った。

あれから一週間。時は経てど何も変わらず、特に飯塚先輩の容態が良くなるわけでもない。昏睡状態の先輩は、人口呼吸器をつけていて、見ているだけで痛々しい。

先輩に笑って欲しいと思うのに、同時にそれが叶わない願いだとかかっていることが辛い。何でもわがままを聞いてくれていた彼は、もういないことを知らされた。

現実には、あまりにも残酷に私たちに突き刺さっていた。

「それでもちゃんとリユウは生きてるから」

本屋で買ったのは、料理雑誌が2冊。1冊は、先輩の病室に置いておくためのもの。1冊は、自分で作る時のためのもの。その2冊を持って、病院へと歩を進めた。

もう迷わず着けるようになった、ちよつと距離のある病院。その集中治療室で、先輩はいまも眠っている。きつと、この先もずっと、だ。

「予約していた真山と遠藤です」

そう言つて通されたのは、真っ白な壁に机と椅子とベッドのある部屋。そこには、見慣れた先生が笑顔で座っていた。私たちの担当医の、加賀見先生。

「あらー、やっと来たわね。ほら、座つて。コーヒーでよかつたでしょ?」

「あ、すみません」

「ありがとうございます」

いわゆるカウンセリングルームという場所である。そこに置かれている物はほとんどが白や、淡い茶色などで統一されている。その中でマグカップの赤と青は、やけに目立っていた。

加賀見先生の緑色でドット模様のマグも、やけにこの部屋では浮いている。ミルクが入ったコーヒーの茶色も、私たちが来ている服だつて。やけに浮いて見える。

「ふたりとも、ちゃんと眠れてないでしょう?」

やだわー、と呟いた加賀見先生が顔を歪めた。それから私たちの前に座るなり、すぐに手帳を広げる。そこには目が回るくらい、ぎっしりと文字が詰まっていた。

「ちゃんと寝ないと美容に良くないのよ、あんたたち」

ずず、とコーヒーを啜った真山先輩が苦笑しながら、加賀見先生のマシンガントークに口を挟む。こういう時、真山先輩は本当に強者なんだと実感させられる。

「俺には関係ない話ですね」

確かに、と思いながら私も目の前の赤いマグに口をつけた。苦いけど、甘い。コーヒーというよりは、カフェオレだった。その甘さで、最近の疲れが癒されるような気がした。

加賀見先生はにっこりと笑いながら、そんなことないわよ、とキツパリ言った。手帳をパラパラとめくりながら、何やら小さな字でまた書き込み始めていく。やはり、ぎっしりと。

その中でぱつと目についたのは、小さな丸文字で書かれた私たちの名前だった。

「真山くんはイケメンなんだから、目の下に隈なんて作ったら勿体ないわよ」

やっぱり、真山先輩は苦笑いをしていた。加賀見先生は一枚も二枚も上手だと実感させられる。はは、と私も笑うと、先生も目尻にシワを作りながら嬉しそうに笑った。

「千早ちゃん、1週間前に倒れてからの体調は？」

1週間前、倒れた。それは飯塚先輩の話聞いていた時の話だろう。シヨックとかそういうのではなく、ただ意識が飛んだ。精神疲労だと言われたが、本当のことはよくわからない。

あれからは倒れるとかいったことはないものの、体調が優れるわけでもない。ただ、身体的な問題は全くない。やる気が出ないということはいつものことで、動きたくないこともない。

「特に何もありません」

「そう、よかったですわ。真山くんはどうかしら？」

「俺も特にはありません」

加賀見先生は依然として、にこにこしたままで手帳に文字を書き込んでいく。真山先輩はコーヒーに目を落として、そのまま黙り込んでしまった。

きっと私と同じ。

身体的な問題なんて一つもない。だけど、心は空っぽになってしまったはずだ。たった1つの大切なものを、壊されてしまったような感覚。絶望とまではいかないが、まるで虚無感と孤独に苛まれているような。

「そうねえ……倦怠感？ 疲労、集中力の低下、目眩、緊張感とかもそうだけど」

加賀見先生は、やっぱり一枚も二枚も上手だった。

黙り込んだ私たちを一瞥してから、加賀見先生はため息を漏らす。真山先輩はまたコーヒーに口を付けて、私は黙ったまま自分の手の平を眺めていた。

やっぱり、そういうのは精神状態として良くないのか。小さく呼吸を繰り返すと、自分の音がやけに大きく聞こえていた。ふ、と短い息を吐き出す音は真山先輩。早く、先輩のところに行きたい。

「今日も彼のところに行くんでしょう？ 情けない顔してちゃだめじゃない」

くすくす笑いながら、加賀見先生は手帳を閉じた。沈黙は肯定だとわかつているはずなのに、それでも先生は何も言わない。私たちとしては、深く追及されないことがありがたいけれど。

甘いコーヒーは、胃の中に溜まって刺激する。だんだんと気持ち悪くなってきた、でも知られたくなくて。強がりなんて、そんなことわかつているけれど。私は出来る限り、黙り込んで俯いた。

真山先輩が眉を下げて「そうですね」とだけ溢した。ここに来るといつだって、表情は決まって苦くなる。それは仕方のないことだから、と真山先輩は言っていた。

「睡眠はちゃんと取ること。少なくとも1日6時間よ。あとは食事ね」

白衣に手を突っ込んで、加賀見先生は椅子から立ち上がった。それから何やらボードを持ってくると、それを机の上に放り投げた。真山先輩の顔が歪む。

ああ、飯塚先輩みたいだ。なんて、呑気にそう思った。

なぜなら、それは食事バランスの書いた紙だったから。いつも私たちに食生活を説くのは飯塚先輩だけで、彼さえもいなくなっただけ、私たちが咎める人はいなくなっただけ。

「……ずいぶんあからさまに嫌そうな顔するのね」

「あ、いえ。これはリュウの管轄なんで」

「あら、飯塚くんの。彼、見た目によらず料理家なのね」

加賀見先生は笑いながら、じゃあ要らないわね、なんて紙をすぐ

に片付けた。やっぱり飯塚先輩が料理家なのは意外なんだ、と思った。マンシヨンのみんなも、意外だって言うし。

「もう飯塚くんのところに行きたくなかった？ しんどくなったらここに来るのよ。次の診察は来週ね」

呆れたような。それでも、穏やかな表情で加賀見先生は笑ってくれた。それから、背中を思いつきり叩かれる。痛いし苦しい気がするけど、なぜかこれくらいされると気が晴れるような気分になる。

軽く挨拶を済ませてから、私たちは飯塚先輩の病室に向かう。とは言っても、ちょっと隔離された場所にある集中治療室なのだが。その一郭で、先輩は一週間経つたいまも、まだ眠り続けている。

エレベーターに乗って、徐々に上へと上っていく。持ち上げられているようなその感覚が、あまり好きではない。だが、集中治療室のある階まではエスカレーターが繋がっていない。さすがに階段は酷だった。

「気持ち悪いなら、残せばよかつたんだ」

「何の話ですか？」

唐突な真山先輩のそれは、訳がわからないけれど、確実に私への言葉だった。きょとんとして返すと、真山先輩は眉間に深くシワを寄せながら小突いてきた。ますます訳がわからない。

「コーヒー。途中で気分悪くなつたんだろ」

真山先輩は気付いていたらしい。隠そうとしても、やはり真山先輩にはお見通しらしい。飯塚先輩もそうだった。私がどれだけ必死に、頑張つて隠しても気付いていた。

笑いながら、いつも決まって同じことばかり言っていた。それが

いまでも、忘れられない。頭の中で貼り付いているみたいに、それは消えずにずっと残ったままで。

「隠すの、下手だよな」

…お前、全然隠しきれてねえぞ。

飯塚先輩は、そう言って笑っていた。確かに、先輩はそう思っていたかもしれない。だけど、違うんだ。先輩が気付いてくれていただけで、他のみんなは気付いてなんてなかった。

先輩は、それだけちゃんと私のことを見てくれていた。

「あ！ セージ！」

高い声が聞こえて、真山先輩が顔を跳ね上げた。びっくりしたのは、私。見れば、黒より色素の薄い、髪の高い女の人が、真山先輩に手を振りながら駆け寄ってきていた。

細くて背の高い、モデルみたいな人だ。髪はストレートで流していて、すごくその人の魅力を出していると思う。すごく、きれいな人。

「キョーコさん、」

「そっちの子、もしかしてセージの彼女？」

真山先輩の言葉の上に、キョーコさんは言葉を被せた。それもあつからかんとしていて、どこか清々しいような顔をしている。

はあ、とため息を吐いた先輩がちょっと私に目配せをした。何のためなのかは全くわからない。首を傾げてみせると、先輩は眉を下げて私の頭をいつものように撫でた。

「違います。彼女は俺のじゃなくて、リュウのですよ」

そう言った瞬間、キョーコさんの目の色が変わった。明るかったその瞳に、どこか悲しげな色が灯った。そして、小さくていまにも消え入りそうな声で、そう、と答える。

「あなたが、千早ちゃん？ 遠藤千早ちゃんね？」

どうして名前を知っているのだろうか。そもそも、キョーコさんは飯塚先輩とどういう繋がりなのだろう。

私にはついていけなくて、思わずフリーズした。するとキョーコさんが悲しげなまま無理やり笑って、私ね、と話を繋げてくれた。

「リュウの姉の、飯塚香子って言うの。いつも弟がお世話になります」

ぺこりと丁寧にお辞儀をされて、奥に潜めていた罪悪感が込み上げてきた。しかし、飯塚先輩のご家族に謝罪をしたいと思っていたから、これはいいタイミングだったのかもしれない。

私も慌てて深々とお辞儀を返すと、あまりに長かったからか香子さんに肩を持たれた。それだけで罪悪感が胸一杯に込み上げて、いまにも崩れ落ちそうな自分が嫌だ。

「わ、私のせいで、飯塚先輩が、こんなこと、なってしまうて……本当に、すみませんでした……っ」

やっとの思いで、それだけの言葉を吐き出した。怖くて顔を上げられなくて、私はただひたすら俯いているだけだった。

真山先輩が私の背中に手を添えて「遠藤」と名前を呼んだ。それに反応することも出来なくて、ただ溢れたのは謝罪の言葉だけだった。

た。

香子さんの声が降ってきたのは、それからずいぶんと時間が経ってからだ。しばらく経ってから、セージ、と低い声。真山先輩はまたしても、びくりと跳ね上がった。

「……先、リュウんとこ行って来な。私、千早ちゃんと話したいから」

そう言って、香子さんは呆気なく真山先輩をこの状況から追い出してしまった。そのあと、何も言われずに腕を引いて連れて来られたのはデイクアセンター！。

そこは人が少なく、香子さんは迷わず窓際の一番隅の席を陣取った。私は香子さんの前に、少し縮こまりながら座る。

「私ね、リュウがいいことしたと思ってんの」

ぼつりと、香子さんが言葉を落とした。私はなにも言わずに、ただ聞いている。

「自分の中で大事な女の子作って、その子のことしっかり守ってやってさ」

じわじわと涙が溢れてきて言葉を出したくても出せなかった。ただ漏れるのは、私の嗚咽だけ。

「千早ちゃんが謝りたくなる気持ちもわかるよ。そんな立場になったら、私だって泣いて謝るからね」

でもね、と香子さんは付け足した。どこか凜とした声が彼女の強さを表していた。

「そこで謝られると、リュウがしたこと間違ってたみたいで……姉貴としては、嬉しくないよ。むしろリュウに泣いてお礼を言っちゃって欲しいよ。《助けてくれてありがとう》と《頑張って生きてくれてありがとう》って」

香子さんはそう言って、私の肩を軽く叩いた。

確かに、飯塚先輩は人口呼吸器を付けてはいるけれど、それでもちゃんと生きてくれている。彼はまだ、生きることを諦めてなんていなかった。

その事実を、私はいままでどう受け止めていたのだろう。確かに、あんな先輩の姿を見て動揺や混乱はあった。それでも“私を庇ってくれたせいでこうなった”ことばかりを見てで、感謝をしていなかった。

彼は今もまだ、ちゃんと私たちと同じ時間を、頑張って生きてくれているというのに。私は、ばかだ。

「……私も、不思議と悲しくないんだよね。人口呼吸器付けてても、それでもちゃんとリュウは生きてるから」

香子さんの言葉は、やはりどこか寂しそうだった。家族がこんなことになって、悲しくないわけがない。真山先輩だって、大切な親友で。私には、かけがえのない大切な人で。

そんな人がいなくなったのだから、みんな辛いのは当たり前だ。それでも《生きてくれている》ことが、前向きになる原動力なのだろう。

香子さんは強くて、しつかりした人。そういうところが、飯塚先輩とすごくそっくりだと思った。

「よし。千早ちゃん、リュウんとこ行こう」

「あ……あの……ありがとうございます」

目を見開いてからニツと笑った香子さんが、愛しそうに抱き締めてくれた。それがすごく温かくて、なぜかとても安心できた。やっぱり飯塚先輩とそっくりだ。

この温かさも、そうしてやって来る安心感も、与えてくれるのは飯塚先輩だった。こうして落ち着けるのも、甘えてしまいたいと思うのも全部、飯塚先輩にしか思わなかったこと。

そつと引き剥がされて、名残惜しいとすら感じてしまった。小さく苦笑すると、香子さんの細い指が私の髪に触れて。その手付きが、先輩と同じくらい優しいもので。

「キョーコでいいからね。敬語もいらないから」

え、と思わず声を上げてしまうと、香子さんはくすくす笑う。それから、さも当たり前と言うかのようにあっけらかんと香子さんは言った。

「千早ちゃんはもう私の妹だもん。いいじゃない、いつかは義妹になるんだし。私、千早ちゃんのこと気に入っちゃった」

リュウの目もばかにはできないわね、なんて香子さんがおどけていた。

どうやら私は香子さんに気に入ってもらえたらしい。どうしてかはよくわからないけれど、それでも人に好かれることは嬉しいことだ。香子さんの隣を歩きながら集中治療室に向かう。その間は、幼いころの先輩の話や真山先輩の話を聞いた。知らなかったこともあったし、知っていることもあって……飯塚先輩と、話したくなった。

「アドレス、交換しようか。あった方がお互いに便利だもんね」

「あ、私から送ります」

敬語は、先輩にも使っているから抜けない。それでも、こうしているだけで香子さんはいいらしい。妹がいると思うと、飯塚先輩がいない寂しさは少しでも薄れるのだと言っていた。

確かに私自身、香子さんが側にいてくれるだけで飯塚先輩がいない寂しさは薄れる。真山先輩だけでは埋められない穴があったのを、香子さんが埋めてくれるのだ。

姉弟ならではの同じ空気や匂い、話し方や性格。1つ1つに安心や信頼などを感じてしまった。

「飯塚先輩しか見てなかったし」

「飯塚サンは最初から千早に甘かったんよ！」

「あ、それ、私も思ってた。真山先輩と千早にだけ、心開いてる感じっていうか」

「でも飯塚先輩、みんなに優しくかったよね」

「それとは違う優しさだと思いますよ、僕は」

「ああ、私も江藤に同感だ」

どうしてみんなが揃っているのだろうか。真山先輩が飯塚先輩のベッドに腰掛けながら、怪訝そうに眉を寄せていた。なんとというか、迷惑だといった様子で。

香子さんだけは「龍之介、こんなにお友達いたんだ！」と喜んでいたけれど。果てしなく迷惑だ、と心底思った。これでは2人どころか、最初の3人にすらなれない。

小さくため息を漏らすと、江藤くんが眉を下げて私の隣にやって来た。それから健太や由利、玲奈、雅先輩には聞こえないように小声で話す。

「邪魔になるからやめましようって言ったんですけど……すみません、僕じゃ止められませんでした」

江藤くんも、江藤くんなりに思うところがあったのだろう。彼もまた、飯塚先輩に不器用なりにも可愛がってもらっていたのだからそれに、健太や由利を止めるのは無謀だ。特に、江藤くんの力では。江藤くんと玲奈が手を合わせても、きつと止められないのだろう。きつと止められるのは、雅先輩だけ。

しかし困ったことに、雅先輩は賢いのに感覚は人とずれている。質の悪い天然と言うべきなのだろうか。とにかく、空気を読めない人

なのだ。彼女は彼女で、真山先輩を心配しているのだろうが。

「いいよ。……江藤くん、ありがとうね。たくさん心配かけたみたいで」

健太も、由利も、玲奈も、雅先輩だつてそうだ。みんな私たちを心配してくれていたから。みんなは見えていない実際の現場に、私と真山先輩はいた。

だから、触れないながらも、ちゃんと心配をしてくれていたのだ。その優しさに感謝したくなったのは、どこか自分が丸くなったからなのか。それはまだ、自分ではわからないことだけれど。目に見えない優しさが、嬉しいと思った。

「俺、絶対に千早と飯塚サンは付き合おうと思ってたんよな。もしくは真山サン？」

私は最初から飯塚先輩が好きだったけど、とは言わない。でも、最初からずっと飯塚先輩だけだった。一瞬で惹かれたという感覚に陥って、気付けば振り向いてもらうのに必死な私が、そこにいた。好きという感情は、ここまで人をがむしゃらに動かすのかと初めて知った。たった1人しか目に入らない、考えられないと初めて知った。触れたいと思うのも、触れて欲しいと思うのも、飯塚先輩だけだった。

「私、千早と真山先輩はナイと思ったけど」
「……由利ちゃん？」

横目で私を見た由利が、にやりと口角を上げた。それを見た玲奈が、目を丸くして首を傾げる。

由利は恐ろしいほど観察力が鋭い。それはもう、知られたくない

ことまでバレてしまうほどに。だから、由利に隠し事なんて意味がない。

「だって千早は、ずっと飯塚先輩しか見てなかったし」

ほら、やつぱり。なんて、心のどこかでため息を漏らした。同じ学科で、同じ授業を取っていて、誰よりも長く由利とは一緒にいた。だからこそ、彼女には汲み取られてしまったのだろう。

健太も由利と同じくらい長くいたが、彼はそれほど聴くはなかった。むしろ鈍いと言うべきなのかもしれない。健太にわからなくとも、由利はちゃんとわかっていたのだ。私のことも、きっと飯塚先輩のことも。

「確かに、遠藤はずっと飯塚の後をついて回っていたな」

笑いながら、珍しく雅先輩までもが一緒になって茶化してきた。恥ずかしいとは思わない。私は、みんなの前でもっと恥ずかしいことをしているから。

だんだんと外は暗くなり、いつの間にか面会の終了時間になってしまっていた。看護婦さんに急かされて、香子さんと別れた。それから、みんなと食べにいく話になり街へと繰り出す。

思い返せば、みんなで食べに出かけるのは事件以来だ。きっと、健太や由利もそれなりに遠慮はしてくれていたのだろう。大丈夫だと言いながらも、私たちが精神科に通っているのは周知のことだった。

健太と由利。江藤くんと玲奈。真山先輩と雅先輩。きれいに3組に分かれた。特に寂しいと思わないのは、心がここにはないからなのか。悩んだって仕方のないことを悩んでしまう。

「……無気力、めまい、疲労感……」

なんとなくだが、わかっていた。あれ以来、体の調子がおかしいのだ。まだ1週間しか経っていないから、あまりハッキリとした結論はまだ出せないが。

睡眠不足からかと思っていた症状ばかりだった。めまい、疲労感。だが、そうなると無気力の言い様がない。以前までは活発に活動していたはずなのに、いまはどうも動く気になれないのだ。

つい先日からは、体の節々に痛みを覚えた。それは、筋肉痛に似た痛み。こんなに一気に体調の低下が見られるとは思わなくて、少し不安になっていた。

というか、以前から度々根拠がなかったり、矛先のわからない不安に襲われる。自分自身でもよくわからない、とにかく“何か”に不安を覚えてしまうのだ。ねっとりまとわりつくような、不安。

気付くと、前方を歩いていたみんなが小さく見えた。このままはぐれてしまっても、きっと気付かれないだろう。消えてなくなりたとは思わないけれど、静かな場所で1人でいたいと思う。

「……りゅーのすけ、先輩」

2人のときだけ、彼をそう呼んでいたのに。もう、そうやって呼べる時間がない。

いつも2人のときは名前で呼び合って。龍之介先輩と呼ばば、先輩は照れ臭そうに笑いながら、私の頭を撫でてくれる。それから嬉しそうに私の名前を紡ぐ。

「千早」。私は自分の名前が好きじゃなかった。でも、先輩が呼ん

でくれるなら何でも大切な物のような気がした。単純と言われれば
そうかもしれないけれど、それほど、彼のことが好きだった。

今になって走馬灯のように流れていく、2人の共有した時間。記
憶の中で先輩は笑っていて、現実ではただ眠っているだけ。

それならば、記憶の中に永住したいような思いに陥る。そうすれば、
私はいつだって先輩と一緒にいられる。狂っているなんて。そんな
ことはわかっている。だから、単なる願い。

だって私には、それを止めてくれる人たちがちゃんといえるのだか
ら。立ち止まれば、手を引いてくれる人がたくさんいる。下を向け
ば、上を向けと叱咤してくれる人がいる。

それだけで、幸せだと思う。

「千早！ おっそいよ」

由利が前方で大きく手を振っているのが見えた。それは近いはず
なのに、どこか遠くにぼやけて見える。みんなが振り返って私を見
ているけれど、みんな遠くではつきりしない。

カツン、とミュールが音を立てた。その些細な音が、やけに頭に
響く。反射的に、危険だと思った。足元が、妙に覚束ない。まるで、
へドロの中に両足を突っ込んだみたいなき分だ。体が崩れ落ちる。

「……遠藤？」

「おい、遠藤！」

異変に気付いたのか、雅先輩と真山先輩が走って来てくれる。そ
れに続くように、みんなが走って来てくれる。ほら、やっぱり。私
に手を伸ばしてくれる人はたくさんいるのだ。

「遠藤先輩、」

「千早ちゃんっ」

「け、健太、救急車！」
「……あ……、おお」

みんなが騒ぐ中、ぷつりと意識が飛んだ。

「晩飯くらいちゃんと食べ！」

「何だ、新入生か？」

由利と健太と3人で、マンションに着いた。そこで、まず初めに声をかけてくれたのは雅先輩だった。その時は真山先輩も、飯塚先輩も不在だったのだ。

雅先輩に挨拶をして、私たちは各自で部屋に籠った。

私はというと、部屋に届いたたった3つのダンボールの片付けをしただけ。1つは衣類で、1つは雑貨、1つは本や教材だ。たった、それだけの荷物。

それを片付け終えたのは夜の8時ごろだった。

マンションの周囲を知ろうと部屋から出て、エントランスに向かう。そこで私は初めて、飯塚龍之介という先輩に出会うことになる。

「何だ、お前」

「あ、初めまして。私、1年の遠藤千早って言います」

ぺこりと頭を下げると、彼は2年の飯塚龍之介だと名乗ってくれた。強面だけれど、悪い人ではないらしい。もう春だというのに、黒いタートルネックのシャツを着ている彼は、あまりにも印象的だった。

誰も寄せ付けたくない、というオーラがひしひしと伝わってきて。何故かそれが、やけに気にかかった。私が口を開こうとすると、真っ先に飯塚先輩が口を開いた。

「……セージ、」

その視線の先にいたのが、真山先輩だった。よ、と片手を上げて

真山先輩が笑う。飯塚先輩はさも嫌そうに顔を歪めて、気持ち悪い、と吐き捨てる。口の悪さも、印象。

「ああ、雅の言ってた1年か。真山誠司だ。よろしくな」

「遠藤千早です。よろしくお願ひします」

「で、遠藤はこんな時間に何してるんだ？」

そういえば、この町の、マンションの周囲の散策に出掛けようと思っていたのに。こんなところで立ち止まってしまっていた。

苦笑しながら、ちよつと、とだけ言つて身を翻す。手荷物もなく、ラフな格好で出かける姿は散歩以外の何物でもない気がする。真山先輩は深く追及することはしなかった。

飯塚先輩は、不思議な力を持っているような気がする。直感的に、そう思った。態度や口癖の悪さは何とも言えないが、それでも彼は何かを持っている気がするのだ。

「あ、そうだ。ここの近くのコンビニって、どこにありますか？」

晩ご飯がなかった、と気付いたのが今だった。もう作る気力もないから、適当に買って済ませようという気持ち。つくづく、私には独り暮らしが向いていないと思う。自炊は得意でないし、片付けも家事もそうだ。

その言葉に真つ先に反応して、あからさまに顔を歪めたのは飯塚先輩だった。その隣であっけらかんとしている真山先輩が、コンビニか、と小さく呟いた。聞けばこれから重宝しようと思っていた。それなのに、飯塚先輩は答えてくれようとした真山先輩の口を片手で塞いでしまった。ふ、とどちらかの息が漏れたのがわかった。私が首を傾げると、飯塚先輩は顔を歪めたまま小さな舌打ちをする。

「……スーパーがすぐそこにある。お前、女なんだから自炊くらい

しろ」

「あ、ばれました？ まあ、今から適当に歩いて探すからいいですけど」

ふは、と笑えば飯塚先輩はますます顔を歪めた。眉間のシワが怖いほどに深い気がするのは、気のせいだと思っておこう。再び身を翻して、階段をかけ降りた。相変わらず、手ぶら。

本当は、晩ご飯なんて買う気もなかった。1食くらい食べなくて生きていけるし、と軽い考えでいた。ダイエットをするつもりはないが、コンビニ食ばかりを食べて太る気もさらさらない。

ハイカットのスニーカーで2段飛ばしは当たり前。実家のマンションを思い出しながら飛び越えた。何が楽しいというわけでもなく、ただ、未来への希望だというべきなのだろうか。願掛けのようなものだった。

独り暮らしに不安がないわけではないし、それが上手くいく保障もない。ただ、それを誰かに打ち明けられるような気性など持ち合わせていない。

それに両親のいない私としては、可愛がってくれている祖父母に迷惑をかけるわけにもいかなかった。そういつた細かな理由が積み重なって、いまに至る。それは、誰にも言わない話。

これからもずっと、誰にも言わないまま過ごして行くのだと。私自身、ずっとそう思っていた。未来といまを比べても、何も変わらないうと。

マンションの前の通りをまっすぐに突き進んで、思ったところで曲がる。気まま。それが、いまの自分には一番いいような気がした。そのままずっと歩いて、自分のわからない道に出る。それもまた楽しい。

「あ、ケータイ忘れた」

完全なる、手ぶら。

ショートパンツのポケットに手を突っ込んで、いつも重宝している通信機がないことに気付いた。ケータイがないということは、例えば道を間違えたとしても助けが呼べないということだった。

間違えても、確実に助けを呼ぶことはしないのだろうけれど。あんなもの、なくてもいいのだとは思った。だけど、いざなければ少物足りなさを感じた。

ショートパンツのポケットから手を抜いて、着ていたパーカーのポケットに手を突っ込んだ。着なれたダボダボのパーカーが、少し重い。それを羽織ったまま、マンションまでの帰路を思い返す。

また適当に行けば帰れるかな、なんて安直な考え。自嘲しながらも足は止めない。近くに光が見えて、どこにでもあるチェーン店のスーパードット。その5メートルほど先にはコンビニが見えた。

「あるじゃん、コンビニ」

覚えておかなきゃ、と頭の中にインプットしておいた。やはり、コンビニは人類における重大な文明であると思われる。私の頭の中では、スーパードットよりも重宝すべき場所なのである。

それからは元来た道を歩くだけだった。なんとなく来た道を、なんとなく帰るだけ。合っているか間違っているかなんてわからないし、いまが何時なのかさえわからない。その状況が、妙に私の冒険心を掻き立てていた。

《なんとなく》というのも、たまにはいいと思う。《なんとなく》を選んで、《なんとなく》過ごす。そこに何か大切なものを見つけた時、人はより成長するのではないのかと思うのだ。あくまでも、私の持論なのだが。

「あ、千早じゃん」

「……健太？」

「マジで千早だったし！ 何してんだよ、こんな時間にー」

けらけらと笑いながら、健太がこちらに歩み寄って来た。それから向き合つと、まじまじと見られる。特に身なりなんて気にしないから、こんな姿を見られたくないとかいふのは思わない。

《干物の典型的パターンじゃないのよ、それ》

昼間に由利に言われた言葉を思い出して、思わず苦笑した。確かにそうだ、と自分で納得してしまったのは言うまでもない。干物とは、言い得て妙なり。

健太がよくわからないけれどもあまりにも楽しそうで、何故か私も笑ってしまった。どうやらコンビニを探していたらしくて、行き方を教えると満面の笑みで「おお、サンキューな！」と言って歩いて行ってしまった。

健太が出て来た、ということはつまり、ここを曲がればマンションに着いたということだ。なかなか短い距離だった気がするけれど、健太の言い方だとそうでもなかったのかもしれない。

マンションのエントランスに入ると、掛け時計が指していたのは10時より少し手前。どうやら、1時間くらい歩いていたらしい。それでも時間を無駄にしたとは思わないところが、また干物と言われる由縁なのかもしれない。冷静にそう思った。

もう階段を駆け上がる気力は持ち合わせていなかった。一段一段を踏みしめるように上る。時折鳴る、スニーカーの音だけが響いていた。キュツ、と音が鳴る。この音を聞くと、部活を思い出すから好きだ。

エントランス、階段の踊り場、2階フロアと順々に進んで、びた

りと足を止めた。フロアにおいてあるソファーに座っている人物を見て、思わず止まってしまった、というのが正しいのだろうか。真山先輩と2人でいたのではなかっただろうか。はたとそう考えていると、鋭い視線が私に突き刺さった。ひくり、と口角が吊る。この人なら、視線で人が殺せるのではないかと思うほどに。苦笑して、頭を下げた近寄る。

「あはは、こんばんは」

「お前……あからさまな作り笑いすんじゃないやねえよ」

怪訝そうな顔をして、飯塚先輩は手に持っていた雑誌を閉じた。雑誌の名前までは見えなかったが、裏向きにして置くのを見るかぎり、ちよつと怪しい。

作り笑い、と言われた笑みを消して私は先輩の隣に座る。許可なく座ったのは、先輩があからさまに嫌そうな顔をして拒否するのが目に見えていたからだ。案の定、眉を潜めた先輩が私を睨むように見た。

怖くないと思うのはどうしてだろう。どれだけ近寄っても、突き放されないような気がしていた。そんな確証なんて、どこにもあるはずがないのに。それでも、何故か心のどこかで大丈夫だと思った。

「先輩は1人ですか？　っていうか、何の雑誌見てたんですか？」

にや、と笑えば益々嫌そうな顔をした飯塚先輩。片手で私の手を押さえ付けながら、片手で自分の背中に雑誌を挟む。器用な真似をする人だと感心しながら、その雑誌を見ようとすることに必死な私。それをどうしても阻止したいらしい飯塚先輩もまた、必死になっていた。流れる時間を忘れて、半ば自棄になりながらも、2人で雑誌をめくって奮闘していた。

ぎゃあぎゃああと奮闘をしてから、何分経ったのかわからない。体

力が切れたのは、ほぼ同時。ボスツと私がソファアの反対側に倒れたのを見てから、限界だったらしい先輩も背もたれに体重をかけた。はあー、と先輩のため息が聞こえて無視をした。疲れたけれど、楽しかったと思えるのは久々にはしゃいだからなのか。それとも、相手が先輩だったからなのか。まだ、私にはわからなかった。

ぐ、と余力を振り絞って体を起こす。先輩は眉を潜めながら、もう1度ため息を溢した。本当に疲れた。やば、と呟くと先輩は真っ直ぐ前を見て、ますます怪訝そうな顔をする。

私が顔を上げるより早く、頭上から笑い声が降ってくる。楽しそうに弾んだ笑い声。真山先輩だった。脇に陸上の雑誌を挟んで、口元を押さえて立っている。

「何だ、セージ」

最後にはお腹まで抱えて笑い出した真山先輩を、さきほどと同じような鋭い目で睨み付ける。それでも真山先輩は笑い続けていた。

飯塚先輩の凍てついた視線に耐えられる人間は、どれほどいるのだろうか。

というか、飯塚先輩が真山先輩を呼ぶとき《せいじ》の《い》が伸びているように聞こえた。気のせいではなさそうだ。《セージ》。明らかにそう呼んでいる。

長い付き合いなのだろうか、2人の纏う空気がやけに似ているようにも思える。何よりも、飯塚先輩の雰囲気棘がない。心を開いているとはこういうことなのだろうか。

「いや、ずいぶん楽しそうだったな。そういえば、コンビニは見たかったか？」

「あ、見つかりました」

けろりと答えれば、隣で飯塚先輩が深いため息。幸せが全部逃げ

るんですよー、なんて言ってやれば、やっぱり鋭い目で睨まれた。蛇に睨まれた蛙、だっけ。いまの私と飯塚先輩は、そんな感じだったのだ。

この場から逃げようと腰を上げれば、そんな思いを知らない真山先輩に引き止められた。何故引き止めた！ とは言わず、黙って苦笑いでやり過ごす。仕方なく再びソファに座ると、飯塚先輩はそっぽを向いていた。

パーカーのポケットに手を突っ込んで、体重をかけて深く身を沈めた。コンビニを聞いた割に手ぶらなことに突っ込まないで欲しいとは思ったが。

やはり真山先輩は空気の読めない天才らしい。むしろ、あえて読まないのかと思うくらいに自然に疑問をぶつけてくる。このときばかりは、この天然め、と真山先輩を恨む。天然はときとして残酷というか、なんと言うか。

「晩飯買いに行っただんじゃなかったのか？」

ふるふるとかぶりを振ってみせれば、真山先輩は向かいのソファに座る。雑誌はチェストの上に置いて、長い足を組む姿はやはり様になる。眉目秀丽というのは得なことなのだと再認識した、いま。

「手ぶらですよ。晩ご飯、食べる気になれなくて」

本当のことだった。

ただ本音を溢しただけなのに、何故か隣からは盛大な舌打ちが聞こえた。それに反するように、前からは堪えているような笑い声。殺しきれてませんよ、真山先輩。ちらりと横目で飯塚先輩を見れば、やっぱり睨まれた。

怖くはないけれど、睨まれたら少しくらい怯む。それでも、飯塚先輩は一匹狼のようで違うと思ってしまう。この人と関わりたい。

そう思うのには変わりなかった。

「……おーまーえーはー！ こっちこい、晩飯くらいちゃんと食べ
」！
」

がつ、と手首を掴まれて引つ張り上げられる。目をしばたたかせ
ているうちに、連れて行かれるは知らない部屋。どうやら、飯塚先
輩の部屋らしい。

「セージ、お前もだ」

「はは、毎日悪いな、リュウ」

「そう思うなら炊事ぐらい自分でやりやがれ、馬鹿野郎」

ずるり、とそのまま部屋に引きずり込まれた。真山先輩は相変わ
らず、雑誌を脇に挟んだまま後ろで笑っていた。

「あいつは一匹狼だからな」

思ったよりもきれいな飯塚先輩の部屋に押し込まれ、その場で放り出された。真山先輩は当たり前のようにテレビをつけて、ベッドにもたれかかるように場所を陣取った。

ワンルールの部屋の隅には、ブルーのカバーをされたベッド。ローテーブルは白いガラス張り。カーテンは淡いブルー。白か青で統一された、きれいな部屋だった。

私が立ち尽くしていたら、後ろから頭を小突かれた。後ろから小突けるのは、この部屋に1人しかない。頭を押さえながら睨むと、先輩は眉間にシワを刻んだまま、片手にはフライパン。

「場所はあるだろうが。適当に座つとけ。で、嫌いなもんとかあるか？」

「いえ、特には」

そうか、と返されて飯塚先輩はキッチンへと戻って行ってしまった。何やら音が鳴っているのを聞きながら、部屋の隅に縮こまるように座る。真山先輩は雑誌をテーブルに置いたまま、静かにテレビを見ていた。

寛いでいるところを見ると、よくこの部屋に来るのだということは一目瞭然だ。パーカーを脱いで、足にかける。大して細くもない足で履くショートパンツは、周りの目の毒のような気がしてならなかった。心の中だけど、ごめんなさい。

しばらくすると、いい匂いが部屋に立ち込める。膝の間に埋めていた顔を上げると、こちらを見ていた真山先輩と目が合った。へら、と笑つと先輩も尻を下げて笑った。

カチャカチャと陶器がぶつかり合う音がして、立ち上がる。ここ

まで何もしていない分、少しだけでも手伝わなければと直感的にそう思った。キッチンに行けば、やけにそこが似合う飯塚先輩が立っていた。

かっこいい、と思って少し呆けてしまったのは秘密だ。しばらく固まっていれば、気配を読んだのか、飯塚先輩がこちらを向いた。というよりは、やはり睨むような目付きで。これは無意識なのだろうと、やっとわかった。

「……何してんだ」

はた、と我に返って飯塚先輩を見れば、なんとも微妙な形容しがたい表情をして立っていた。灰色のタートルネックに、ジーンズ。片手にはフライパンで、反対の手には白い底が深いお皿。やはり、似合っていた。

慌てず、落ち着いて。平静を装って、につこりと笑ってみせた。飯塚先輩は邪魔だとも言いたげに、私を見てため息を漏らす。きつと私よりもキッチンが似合う、と思いながら先輩に近寄った。

「お手伝いです。料理中は邪魔だと思って、いま」

料理が全く出来ないわけではない。あくまでも面倒臭いだけで、レシピさえ見ればある程度のは作れる。お菓子などであれば、レシピを見なくとも作れる自信がある。それでもきつと、彼の足元にも及ばないのだろうが。

無愛想ながらも、飯塚先輩が顎で指示をくれた。重なっていたお皿。1つ1つばらけて置くと、先輩は何も言わずに盛り付けていく。カルボナーラ。美味しそうな匂いをキッチンに充満させて、きれいに盛り付けられた。

ただ、1つ1つのお皿に乗せられているパスタの量が多い。食べられるのかも不安なのだが、文句は言わない。せつかく作ってくれ

ただ、しっかり食べよう。完成と言われて、そのお皿をテーブルに運んだ。

「あ、遠藤。悪いな」

真山先輩は、あれからずっとテレビを見ていたらしい。目の前に置かれたパスタを見て、カルボナーラか、と呟いた。その顔はどこか嬉しそうで、どうやらそれは真山先輩の好物らしかった。

3往復してパスタを運び終わると、やっと戻ってきた飯塚先輩がフォークと水を持ってきてくれた。軽くお礼を言えば、彼は首を横に振る。それから、のんびりと座っている真山先輩を呆れたように見てため息。

「働かざる者食うべからず。いつも言ってるだろうが、セージ」

低い声。だけど、怒っているわけじゃないことはわかった。「そうだったな」なんておどけながら、フォークにパスタを巻き付ける真山先輩。はあ、と隣からまたため息。本当にこの人の幸せはいずこへ。

促されて私も座る。フォークを持って、パスタをくるくると巻き付けた。それを一口で食べると、口の中にチーズとブラックペッパーの味が広がった。濃い味付けなのに、しつこくない。美味しい。

思わず顔を上げて飯塚先輩を見れば、何故か真山先輩が笑いだす始末。当の飯塚先輩は怪訝そうな顔をしながら、早く食えと急かしてくる。私の心中を察したのか、言葉を紡いだのは真山先輩だった。

「はは、美味しいだろ、リユウの手料理」

それに頷くと、飯塚先輩が小さく馬鹿野郎と呟いた。これは照れ隠し。というか、隠しようがないくらいに耳まで真っ赤になってい

る。それがどうにも、可愛く見せる。

…まあ、彼に可愛いという単語は似合わないのだが。

「腹立つくらい美味しいですね、カルボナーラ」

「おまつ、褒めてんのか貶してんのかハッキリしろ！」

「褒めてるじゃないですか」

「はは、久々に賑やかだな」

そんなこんなで賑やかな食事を終えてから、片付けた食器を洗う。先輩は要らないと言ったけれど、一食のお礼ということで突き通した。かちやかちやと洗い物をしていたら、やっぱり笑顔の真山先輩がきた。

しかも、何も言わずにただ後ろに立っている。冷蔵庫にもたれかかったまま、腕組みをしていた。飯塚先輩は先ほどまでの真山先輩のように、テーブルに肘をつけてテレビを見ているだけ。こちらには気付いていない。

なかなか洗い物が終わらないことに痺れを切らしたのが、真山先輩が隣に立つ。視線は私ではなく、飯塚先輩に向けられていた。それから、まるで独り言のようにポツリポツリと言葉を溢し始める。

初めてだよ。と。

そう言われて、本気で首を傾げた。唐突すぎて、その言葉が何を伝えたいのか。それを汲み取ることができなかったのだ。この言葉足らずな状況下では、私の反応が一番正しいと思うのだが。

「リュウが、あんな風に世話を焼くのは初めてなんだ。あいつは一匹狼だからな。俺も近づくのにはずいぶん時間がかかったんだ」

困ったように笑いながら、真山先輩ははつきりとそう言った。どうやらこの世話焼きは私が後輩だからだとか、しつこいからとか、たまたま居合わせたからとかではなかったらしい。彼なりの、何らかの判断による行動。

「気に入られたんだよ。まあ……それなりに、気にしてやってくれ」
やっぱり笑ったまま、真山先輩は飯塚先輩の元へと戻って行った。気に入られた？ まさか。そう思いながらも、心のどこかで嬉しいと感じている私が出た。

特に気にいられているという実感はないけれど。それでも少しは心を開いてくれるなら、頑張りたい。今日。数時間前に会ったばかりの人。でもやけに気にかかって、どうしてか突っかかりたくなる。誰かに認めてもらうと、もう止まらないような気がした。それでも突っかかっていいと言われるのなら。私は遠慮なくタツクルしていこう。完全に、飯塚先輩が心を開いてくれるまで。

「飯塚先輩っ」

隣に座ると、あからさまに嫌そうな顔をされた。真山先輩が小さく笑って、私と交代で腰を上げる。帰るのか、と飯塚先輩が聞く前に雑誌を持って玄関に向かう先輩。

さすがに2人はどうなのか。そう思って後を追うと、飯塚先輩も後ろからついてきた。にっこりと笑うと、容赦なく額を叩かれた。これも、照れ隠しらしい。また真山先輩が笑っていたから。

「まだ十時だろ。遠藤、遠慮なく邪魔していいぞ」

ここは俺の部屋だとも言いたげに、忌々しそうに顔を歪めた先輩を見て苦笑いを溢した。でもさすがに、個人の時間まで潰しきる

わけにはいかない。帰ります、と言いかけて口をつぐむ。

パーカーがない。そういえば、足を隠すために脱いでいたはずなのに。先輩に断って部屋の中に入ると、パーカーを掴んだ。そして身を翻そうとした瞬間、先輩の怒鳴り声と共にバンツと大きな音が響いた。

怒鳴り声はハッキリと聞こえなかった。ただ、あの中でわかったのは大きな音は扉を閉めた音だということ。もしかしたら、私は帰るタイミングを逃してしまったのかもしれない。

それでもいまのうちなら、と立ち上がる。戻ってきた先輩に睨まれて、視線だけで座るように促されてしまった。おずおずと部屋の隅に座ると、先輩はベッドにもたれかかって座った。

「……いま、セージと上村が廊下で話してる。話がややこしくなるから、いまは絶対に部屋から出るな」

「わかりました」

そういうことなのか。ただやはり、怒鳴った理由だけはわからなかったが。気にしないことにして、足にパーカーをかけた。

いまばかりはパジャマのようなショートパンツを恨んだ。楽だからと重宝していたけれど、これからは使う場面を気をつけようと誓った。外に出るときは、せめてレギンスでも履いて素足だけは避けることにしよう。

しばらくはぼんやりとテレビを見ていたのだが、この静かな空気に呑まれきっていた自分に気が付く。静かな空気は、不思議と苦痛にはならなかった。むしろ、落ち着いてしまっていた気すらする。

何か話題を出そうとして、辺りを見回してみる。が、物がなさすぎる部屋だから話題はなかなか見つからない。それでも脳裏に1つの疑問が過った。その疑問をふと、口にする。

「そついえば先輩って、何学部なんですか？」

私たちの通う大学には、学部は大きくわけて2つ。その学部の中に、たくさんの方が存在するのだ。まあ、いわゆる当たり前のごく普通の4年制大学といったところだろう。

「健康科学部」

「同じですね。学科は？」

「……健康栄養学科」

健康栄養学科。照れ臭そうにそういった先輩は、そっぽを向いてしまった。そう言われてみれば、料理ができるからそういった選択肢もあるわけで。栄養士という資格が思い浮かんで、へえ、と感嘆を吐いた。

自分にはそんな選択肢はなかった、と思う。料理はさほど得意でないし、栄養なんてからきしだめ。食事バランスなんて考えたこともなければ、自分の食べたものすら覚えてもない。明らかに不向きな学科だった。

「すごいですね」と思わず漏らすと、飯塚先輩は目を丸くして顔を上げた。鳩が豆鉄砲とはこういうことか、と変に納得してしまう。すごい、の意味がわからなかったのかもしれない。少し、唐突すぎたのだろうか。

「私には不向きな学科で。だから、余計に先輩はすごくなって思っただんです」

素直な感想だった。特におだてているわけでもなく、嫌味を含んでいるわけでもない言葉を連ねただけ。それなのに、飯塚先輩は眉を下げた笑った。初めて笑顔を見せてくれたのだ。

なかなか見せてくれないだろう笑顔は、ドストレート。空振り三振、そんな気分させられる。……という説明はわかりにくいだろう

う。

とにかく、その笑顔で胸がくすぐったいような、なんとも不思議な気分になったのだ。胸を掴まれたかのような、ほんの少しの痛みと共に。じんわりと温かく、胸に染み込んでいくのがわかった。

「遠藤は」

「理学療法学科です」

先輩の言いたいことがわかって、思わず口からつい出てしまった。ちゃんと聞ききる前で、申し訳ない気持ちにもなったが。あまりにも先輩が優しく笑うから。また、胸が痛くなった。

「物好きしか寄らないから」

その日は、そんな他愛もない会話を交わして時間を過ごした。帰ったのは十一時過ぎだったが、誰にも見つかることもなく、何の問題もなく1日は終わった。

後日、由利と同じ写真部に入った玲奈と昼食を取っていたとき。ふいに、恋愛の話になっていた。それは高校生のような、あのイケメンが誰と付き合っているかとか、そういった内容だったのだ。

だが、それは由利の「2人とも恋愛してないの？」という質問で一変する。

Aランチを食べていた玲奈はぴたりと手を止めた。由利は気にせずBランチを食べ進めている。そこで何故かカレーをチョイスしていた私は、思わず握っていたスプーンを落としかけてしまった。

「なっ……、んで、そういう話になんの？」

玲奈の視線が泳いでいる。もしかしたら、気になる人くらいはいるのかもしれない。という由利はかなり普通で、人気があるのに相手にしない冷たさを持ち合わせている。そのせいか、男っ気が全くない。

由利は手を止めて、にやりと妖しく口角を上げた。私はといえば、喉に辛味のせいで痛みを感じて、水で流すのに必死なのだが。由利はそれでも笑みを崩さず、机に肘をつけて私と玲奈を交互に見やる。

「大丈夫よ、飯塚先輩は物好きしか寄らないから」

「え……そうだったの、千早ちゃん？」

「ちよっ、何言ってるの！ 第一、私……あんまり、そういうの、わかんないし」

後半部分はかなり小声になってしまった。でも確かに、自分の思いを今までに恋だと確信したことはない。むしろ気付かぬうちに終わっているのかもしれない。だから、余計に恋かと聞かれるとわからない。

《恋》という、そのものの感情がしっかりと判別が出来ないのである。

苦笑を溢してカレーを口に運んでいく。由利はそれを見て鼻を鳴らし、興味深そうな好機に満ちた目で私を見ていた。

視線をかわして、黙々とカレーを食べ続けた。玲奈は私と由利を交互に見合わせてから、何も言わないと悟ったのか箸を進める。由利はデザートプリンをつつきながら、何も言わずに食堂の入り口の方をじいっと見ていた。

それから急に立ち上がると、ぱたぱたと入り口に向かって走っていく。玲奈はそれを見送ってから、大きな目をもっと大きく見開いた。それから焦ったように「千早ちゃん」と何度も私を呼んだ。

近くでびたりと多数の足が止まったのがわかった。顔を上げて思わず目を見開く。声を上げそうになったのを飲み下して、平静を装ってみせるのが精一杯だった。

「こんにちは。キャンパスで会うの、初めてですよね」

にこりと笑ってみせれば、向かい合っていた4人のうちの2人は小さく笑った。それから6人がけの椅子にそれぞれ座る。

私の向かいには由利。由利の隣には玲奈。玲奈の隣には雅先輩。雅先輩の向かいには真山先輩。私の隣には、飯塚先輩が座った。

それぞれが再び昼食を取りだして、食べ終わった私と玲奈と由利は次の授業の確認をする。私は、次とその後で授業が終わる。そのあとはバイトに行くつもりだった。

看護学科の由利は次の授業がなく、その次があるだけ。教育学部の玲奈は次と、ひとつ飛ばしで授業があるらしい。学部や学科が異

なると、なかなか授業の時間が重なることがない。だから、こうやって一緒に昼食を取れる時間も珍しい。

聞いたところによると、雅先輩は教育学部。そして真山先輩は理学療法学科。いま、ここにいない健太はデザイン設計学科である。なかなか重ならない、というのは誰も同じ学科ではないからだ。

「千早、終わるまで待つから一緒に買い物行こうよ」

「あ、ごめん。バイト」

私の返答に、あからさまに顔を歪めたのは由利だ。玲奈は事前に誘っていたらしく、それなら私も、ということになったのだろう。

特にお金に困っているわけではないのだが、あつて困るものでもない。それに、いつまでも祖父母にお小遣いと称した生活費や諸々を貰い続けるわけにはいかないのだ。だから、ほぼ毎日のようにバイトに明け暮れているわけなのだが。

由利はそれでも引く気はないらしく、じゃあ、と言葉を続けた。

食い下がるか、と思った私も手帳を開いて予定を確認する。玲奈は由利と私を見て、困ったように眉を下げて笑った。

「火曜日！」

「サークル」

「水曜日！」

「バイト」

週に5回くらいはバイトを入れているせいか、空いている日はほとんどない。そして空いている2日はサークルの活動に勤しんでいる。もちろん、それには同じサークルに加入している玲奈も一緒にだ。

怒涛のやり取りを見ていた玲奈も、私のバイトの回数に驚いたらしい。先輩ですら、こちらを見て固まっているのが見てとれた。複

雑な家庭だということを説明していないからか、余計に不思議なだろう。

一週間のサイクルは、もうほとんど定型のようになってしまっている。月曜日から始まって、バイト、サークル、バイト、バイト、サークル、バイト、バイト。バイトは店長と親しいだけあって、たくさん入れるようにしてもらった。

眉間にしわを寄せた由利が頂垂れたのを見て、ごめんねとだけ言っておく。家庭のことを教えるのは好きではないし、祖父母の話をするのも好きではない。変に同情されるのは嬉しくないからだ。

「……千早って、いつか絶対に体壊すわよ。過労死でもするんじゃないの」

滅多なことを言うものじゃないぞ、桐島。

雅先輩の言葉が飛んできたからか、由利はそこで口をつぐんだ。恨みがましいとも言える目で私を見て、ありえないとも言いたげに唇を尖らせる。

玲奈は心配そうな顔をしてくれていて、大丈夫だと言わない代わりに微笑んだ。それから空っぽになったお皿をのせたトレイを持って立ち上がる。

「……じゃ、次、授業ですから。失礼します」

先輩たちにそう言って、身を翻した。ガタン、と音がしたのに前の2人が大きく反応した。「千早！」呼ばれたけど、聞こえないふりをする。

これ以上、あの場にいたのなら家庭のことを聞かれるかもしれない。そう思うと、黙って静かに座っておくことなんて出来やしなかった。生憎、私は聞かれたくないことを笑ってかわせるような性格は持ち合わせていない。

トレイを返却口に返してから、早足に食堂から出た。それから歩き続けて、少し早い教室にいるのも悪くないかと思いを回らせる。逆上したわけでもなかったのも、自分でも驚くほど冷静だった。

行くあてもない、と思ったときに重要なことに気付く。手帳がないのだ。ちゃんとカバンに入れたはずなのに、まさか食堂にでも置いてきてしまったのだろうか。慌ててカバンを漁るが、手帳が出てくることはなかった。

あれには、入寮する前日に祖父母と撮った写真が入っている。それだけではない。小学校の入学式、卒業式。中学校、高校のそれらも。祖父母と3人で並んで撮った写真が7枚。きつちりと挟んである。

そして裏にはきつちり日付と何の日か、祖父母の思いまで事細かく記してある。それは祖母の字や、時には祖父の字で言葉が綴っていたのだ。私の宝物とも言える品だ。

「おい、遠藤」

後ろから響いたのは、心地のいい低い声。目付きは悪いけど、思いやりのある人。さっきまで、黙って私の隣でご飯を食べていた人だった。そんなこと、振り向かなくてもわかった。

振り返ると、彼は仏頂面である物を差し出してきた。茶色の表紙に、透明のビニールカバー。所々からは付箋がはみ出していて、物を挟みすぎて少し分厚くなっている。それは紛れもなく、探していた手帳だった。

「ありがとうございます」

受け取って中を確かめるとちゃんと私のものだった。証拠に、例の写真がきつちり7枚挟まっていた。それをカバンに押し込んで、向き合つと先輩が眉を寄せた。

私の回りの人は、よく眉を寄せるなあ、なんて。そんなことをずっと呑気に考えていた。ということ、必然的に私が人にそういう顔をさせているということになるのだが。

心の中で軽く自嘲をしていたら、ふいに頬に無骨な手が当たった。私より遙かに大きくて、骨ばった手。その手はやけに温かく、頬を擦った。見上げれば、鋭い瞳と視線が交わった。当たり前といえば当たり前なのだが。

その瞳が一瞬陰つたのを、私は見逃さなかった。その手が頬を再び擦った。まさか、と思ったが信じたくはない。それでも、もう知られているのなら仕方のないことだ。意を決して口を開くと、言葉を遮られた。

「悪い、写真、見た」

細かく区切られたことで、文章を理解するのに時間はかからなかった。それと同時に、やっぱり、という少し萎えた気分になる。

先輩もみんなと同じような瞳で、同じような反応をしながら、同情するのだろうか。もしそうなならば、私がこの場で彼を引つ叩くこともあるだろう。それはないと願いたかった。

先輩は口を開いて、ゆっくりと言葉を紡いでくれるのを待った。そして紡がれていく言葉を、ひとつも聞き逃さないように耳を澄ませる。

もしかしたら、私は彼を信じたいのかもしれない。心の隅で、自分の心情を客観的に悟った。

心のどこかで先輩になら知られてもいいと思っっている自分がいた。同情されたっていいから、知っていて欲しいような気持ち。先輩ならいいと、本気でそう思ってしまうのは何故なのだろうか。

「別に。お前が言いたくないなら聞かねえよ」

そう言って、先輩は身を翻した。

今まで、誰かに聞いて欲しいと思ったことはない。むしろ、聞いて欲しくなかったくらいなのに。この背中にすがりたいと思ってしまつのは何故なのだろうか。ふいに泣きたくなつて、唇を噛んだ。すがりつきたくなるなんて、いままで一度もなかったことなのに。どうして、いま。しかも、よりによって彼なのかがわからない。甘え方がわからないこともあって、どうすればいいのかもわからない。晴れた空の陽射しが痛いくらいに刺さってくる。先輩に背を向けて、次の教室まで走った。

振り向かなかつたのは、振り返らない先輩を見たくなかつたから。ちよつとくらいは気にして欲しかつたというワガママな心を、見つけたくなかつたから。全てん振り払うかのように、私は走り出した。でも、その全力疾走が長く続くはずもなく、どんどん減速していく。それでも、現役より速度こそ落ちたものの、体力はまだある方だと思う。失速して、その場で思わずしゃがみ込んだ。

「望まれて、産まれて来たかったなあ」

ポケットを探って、ピンク色のケータイを取り出した。慣れた手付きで操作をして、呼び出すのは電話帳の画面。「家族」。そう表示されているフォルダに登録されている件数は、3件だけある。

遠藤の血筋の親戚と、祖父母の実家と2人で1台のケータイ。寮に入るとき、高校で貯めたバイト代で1台だけ買って渡したのだ。もちろん、その支払いも私がしている。思わずその番号を引き出した。

かけたいという衝動に駆られて、決定ボタンを押そうとした。だが、祖父母に心配をかけたくないという思いで親指は押すのを躊躇う。きつとこれが、私が人に甘えられないということを表しているのだろう。

何もせずにケータイを閉じて、よろける足を奮い立たせて歩く。授業を出る気にはなれなくて、ぼんやりと中庭のベンチに座った。人のほとんどいない中庭は、静かで柔らかな春の陽射しが差しているだけだ。

カバンから手帳を取り出して、そこから写真を抜いた。達筆とも汚いとも言える祖父母の字を指でなぞりながら、小さくため息を漏らす。これこそが、祖父母が私に愛情を注いでくれたという証。

《千早六歳、入学式。もう小学生になりました》

《千早十二歳、卒業式。まだまだ大きくなりそうだ》

《千早十二歳、入学式。制服がよく似合っています》

《千早十五歳、卒業式。ずいぶん大きくなったなあ》

《千早十五歳、入学式。立派な大人になってきました》

《千早十八歳、卒業式。皆勤賞で賞状を貰っていた》

《千早十八歳、入学式。本当にいい子に育ちました》

そんな字を見て、小さく息を吐き出す。やはり、祖父母にはこれ以上ない愛情を注いでもらっていた。両親がいない分、祖父母が私を愛して育ててくれていた。それは自慢だけれど、やはり偏見があるものなのだ。

同情されるのは嫌いだし、偏見の眼差しで見られるのはもっと嫌いだ。いや、それはいまでも変わらないだろう。祖父母を自慢したかったのだが、出来なかった。

それは、子供でも立派にプライドとやらがあつたからか。いまになつては、そのプライドとやらを大切にしている反面、ちっぽけだとも思っているのだが。はつきり言わない私を祖父母は全く怒らなかつた。

祖父母は、ちゃんとわかつていたのだろう。

ちっぽけながらも、私とそのプライドをどれだけ大切にしていたのかを。そのプライドの中には、密かに両親がいない寂しさを知られたくない気持ちか隠されていたことも、すべて。

だからこそ、あえて触れなかつたのだろう。

「……馬鹿野郎。授業出るんじゃないのかよ」

頭上から声が降って来て、思わず顔を上げた。仏頂面というよりは、苦虫を噛み潰したような顔をしている。肩からはカバンがぶら下げられていて、きつと移動中に通つたのだろうと思つた。

見られたとはいえ、いままで隠していたからか。意識せずに写真をすぐさま手帳の間に挟み込んだ。それを見て、飯塚先輩はますます眉間のしわを深く刻む。それに気付いてから、思わず苦笑いをこぼした。

慣れや習性つて、怖いですね。そう溢すと、先輩はしわを伸ばしてからベンチの空いたスペースに腰を下ろす。隣というポジションに照れも何も感じない。むしろ当たり前のような、そんな気さえするくらい。

私が話し出すのを待っているのだろうか。彼が話す気配は、全くと言っていいほどない。むしろ、ここからは一切話さないのではいいのかと思うほど、静かに腕組みをして背もたれに体を預けている。

「私、両親いません」

意を決してそう呟くと、先輩からの反応はなかった。聞く気がないのかと思ったが、反応がないのはいつものことである。わざとだ。わざと無反応になって、私が少しでも話しやすい場を作ってくれているのだ。

そういうタイプの人だったなあ、と思って顔が綻んだ。やはり、先輩は優しい人なのだと思います。知らされる。

「……知らないんですよね、両親の顔も声も何も。産まれてすぐに、祖父母に預けられたらしくて」

全く知らない。父や母の顔も、声も、体温も。彼らに愛された記憶なんて、どこにもなかった。産まれてすぐの私を、母は一度だけ抱いて手放したらしい。

そう、祖母が泣きながら話してくれたことは、いまでも鮮明に思い出せる。隣で祖父も肩を震わせながら、なぜか私に謝った。彼らに罪なんてどこにもないのに。

父は、そんな私を受け取った。母が家を出て行く後ろ姿を見送って、何を思っていたのか。そんなことは誰も知る由がなかった。もちろん母も私も、真実を知る者は当事者である父しかいないのだ。

父には、ちゃんとした奥さんがいた。つまり、母はいわゆる不倫相手だったのだ。結婚が出来ない相手の子供なんていらないと、私を捨てていった。なら、どうして産んだんだと責めてやりたかった。そして結果、父も私を捨てることとなる。それは半ば当たり前のようにも思える。

体裁云々もあるが、それ以前に赤ん坊を連れて帰って正妻に何と言うのか。口が裂けても、浮気相手との子供だとは言えないだろう。

それに養育費だってバカにならない。そう思えば、彼らが私を捨てたのは妥当のようにも思えてしまった。私は、望まれて産まれてきた子ではなかったのだから。

「……祖父母は、私の祖父母じゃないんです。特別養子縁組、ですって。私も、あんまりよくわかってないんですけどね」

特別養子縁組とやらで、戸籍上の私は養子ではなく実子になっていた。祖父母の一人娘のご夫婦の、実子に。

しかし、私を欲しいと言ったのは祖父母。子供が産めないらしい娘さんに、どうしても孫が欲しいのだと頼み込んだらしい。快諾はしてくれたものの、育てるのは祖父母に任せると。そういった流れで話は締結した。

その話を聞かされたのは、小学校3年のころ。突然の話だった。娘さんが帰郷するのに、どうしても説明しておきたかったのだと祖父母が泣きながら言った。物心がつき始めていたころだったから、理解はできた。

それと同時に、私を捨てた両親を激しく憎んだ。呪い殺せるのではないかと思うくらいに恨んでいた。だが、いまや他人なのだと割りきることその感情を振り払った。

娘さんはよく可愛がってくれた。それはもう、自分の妹のように。戸籍上は娘であっても、妹のようだと笑っていたのをよく覚えている。旦那さんもいい人で、娘さんと同じように可愛がってくれた。それは、いまも変わらない。

「特別養子縁組って、ワケアリっぽくて嫌いなんです。いや、実際にワケアリだけど」

ふは、と笑ってから静かに俯いた。いままで、ずっと泣くことを我慢していた。だからこそ、言わなかった自嘲の言葉だった。たくさんある。でもいまなら、言ってもいいかもしれない。先輩だから、いいのかもしれない。

「捨てられてもいい。それでもいいから……せめて……少しでも望まれて、産まれて来たかったなあ」

捨てるという結論に至るのは、複雑な事情があつてこそだろう。だが、母が私を産んだ理由は父に対する恨みみたいなものだ。きつと、わざと押し付けたのだらう。これが不倫相手の子供だと、奥さんに知らせるために。

ある意味、望まれていたのかもしれない。だが、それは一瞬の母から父に対する呪いのようなもので。嬉しいとか、抱きしめたいなどと思われて産まれてきたわけではなかった。

不倫相手の子でも、少しでも普通の子のように、望まれて産まれてきたかった。せめて一瞬だけでも、血縁ある両親に愛して欲しかった。私を手放すことを、少しでも迷って躊躇って欲しかった。

「……私……、いらぬ子だったみたいです」

笑えない。自然と滑り落ちる涙はジーンズを濡らして、色を変えた水玉模様を作り出していく。それを見ながら、唇を噛んだ。

本当は認めたくなかったのかもしれない。愛されていなかったことも、望まれて産まれてきたわけじゃなかったことも。躊躇いなく捨てられたのだということも。

言葉にしてしまえば、認めてしまったようで嫌だった。そう考えると、それはあまりにもストンと簡単に腑に落ちる。

「……昔はそうだったかもしれないねえな。それでも、いらぬ子じゃ

ねえだろ。少なくともいまは」

ぎゅっと手を握られて、ぽつりと言葉が落とされた。低い声が、やけに胸に染み入ってくるのだ。その手を強く握ると、もっと強い力で握り返してくれた。その手がやけに温かくて、涙が止まらなくなってしまうた。

きっと、飯塚先輩は同情をしない人だと思っていた。だからこの言葉は、彼なりに励まそうとしてくれていたのだろう。「少なくともいまは」と付け足すあたりが、先輩らしいと心の隅でそう思っていた。

本当に同情しているなら。彼だってきっと「そんなことない」って言うのだろう。それが一般的な同情で、私が一番嫌いな返され方だ。そんなことなかったら、私はきっと父か母に育てられているはず。

そうじゃないから、特別養子縁組として実子になって、祖父母と過ごしている。結果があるんだから、そんなことなかった。慰みじゃなく、笑い飛ばすなり励ますなりをして欲しかったのだ。

「写真。お前のこといらないガキと思ってたら、普通はそんな顔できねえだろ」

「……………」
「それに、いまは。桐島も宮村も上村もいるだろうが」

いまの私が、誰かに必要とされていますか？

必要とされてこそその存在価値だと思っていた。だから、誰かに必要とされたかった。産まれてきた意味が欲しかった。愛してくれる人がいて欲しかった。

悲劇のヒロインぶっていたわけじゃない。だけど、荒んではいた。見た目はそれほどでなくても、心が。そうして見えなかったものが、もしかしたらたくさんあるのかもしれない。

いや、見えなかったわけじゃない。見ていなかった。見ようと、していなかったのだ。気付くのが、遅かった。私がわからなかったことを、先輩が見つ付けてくれた。先輩が、手を引いてくれている。きつと、いまの私の顔はみつともないはずだ。涙でぐちゃぐちゃになって、酷い顔をしているのだろう。化粧をしていなかったことだけは、本当によかったと思った。でもやはり、顔は上げられない。先輩は何も言わずに、ただずっと手を握ってくれている。その手は変わらず温かくて、いつもの少し冷たい手とは違った。どうしてとか。聞かないけれど、やはり少し不思議な気がした。

「俺、姉貴いる。3つ年上の自信過剰な姉貴が」

先輩にお姉さん、だなんて想像もできなかった。

「お前と足して割ったら、ちょうどいいんだろっな」

ばかにするわけでもなく、先輩はそう言って小さく笑った。きつと、私が気に病まないようにしてくれたのだと思われる。彼どこまでも優しい人なのだと、いやでもそう感じさせられた。

「……人に、同情されるのは嫌いです」

誰だっけと思う。だけど、何故かそれが口をついて出た。

「でも、いま思いました。信じてみるのも、頼ってみるのも……弱音を吐くのも。少しくらいなら、悪くないかもって」

ずいぶんと、楽になった。心が軽くなって、少し前向きになろうとも思えた。すぐに人に頼ったり、甘えたりは出来ないだろう。それでも、この先は少しずつ、人に頼ることを覚えていこう。

自分でも、これは大きな一歩前進だと思う。いままでは足踏みのようなことばかりで、それでも前に進めたと感じていたけれど。違うんだ。これが本当の、一歩前進。

「……今日はもう、帰るか」

「あ、そう、ですね」

空気はやはり、どことなく重かった。仕方のないことだと思いつがらも、この気まずさが明日まで残らなければいいなんて。そう、心の隅で密かに願った。

「飯、作って欲しい時はメールしてこい」

先輩には言わなかった。この名前を付けたのは、私を捨てた両親だということ。これだけ変えないでくれと、祖父母へ譲られる時に頼まれたことも。言わなかった。みんなが呼んでくれる私の名前は、私が一番嫌いな名前。それだけは、言わなかった。

ワンルームの隅に置かれたベッドに飛び込んで、息を吐き出した。人前で泣いたのは久しぶりのことだった。いつもは強がって、笑顔を顔に貼りつけていることが多くて、泣いたり怒ったりすることなんてなかった気がする。

だから今日、飯塚先輩は実はこちらの中で特別な位置に立っているのだと確信を持った。気付いていなかったわけじゃなく、もしかしたら気付きたくなくて、気付かないふりをしていただけなのかもしれない。

恋なんてしてしまえば、誰かを好きになってしまったら、離れる時の辛さを味わうことになる。それがすごく、苦手だった。身が割けるような思いままでして離れないといけない日が来るのなら、いっそ好きなんてなってしまう方がいい。それが、いままでの成長過程で至った私なりの結論だった。

「でも、気付かざるを得なかったもん」

こうして認めることで、またチクチクとした痛みを味わうことになる。それもまた嫌いで、恋というのは非常に厄介なもののように思っている。未だに、それは変わらない。

だからこそ簡単に本気の恋だと言う周りのみんなが不思議でならない。

酷くて、次の日に新しい彼氏や彼女を作る人だっている。そういつた人たちを見て来たからこそ、両親があんな人たちだったからこそ、

私は恋いう未知のことに憶病になってしまっているのかもしれない。

「恋なんて所詮、片方がどれだけ真剣であつても冷めれば終わり」

そういう理論が頭にしっかりとインプットされているからこそ、余計に恋愛をしにくい体質なのだろう。それは自分でもしっかりと理解している。

はあ、と深いため息を漏らしてから、今日もまた晩ご飯を食べていないことを思い出した。が、特に食べる気にもなれずにベッドでテレビを片目にまどろむ。

いま人気のアイドルが繰り広げるバラエティー番組を見ていたが、それほど面白くないのでチャンネルを変えた。ドラマは私の好きなタイプではなくて、どれもハズレのような気がした。

うつらうつらと船を漕ぎ始めたとき、インターフォンが鳴った。

無視、しちやってもいいのかな。

半分、意識の飛びかけているせいか体は言い聞かせてもなかなか動いてはくれない。そういえば、いまは何時なのだろうか。手元にあるケータイに手を伸ばす気力もなく、かといって壁掛けの時計に顔を向けることすらままならない。

うつ、と小さく唸ったところで二回目のインターフォンが鳴った。

起きられないんです。

声にならない批判を言いながらも、言うことを聞いてくれない体にムチを打つ。用事なら明日にして欲しいと思つたが、回せないからしつこくインターフォンを押すのだろうから仕方ない。もぞもぞとミミズのように這って動いていると、再びインターフォンが鳴らされる。本当にしつこい。

それどころか、今度は何回も何回も連続で押されるのだから溜まったものじゃない。

慌てて飛び起きて、相手が誰なのかを確認もせずに扉を押しあけた。それと同時に、ゴツンと痛々しい音が響く。扉には、しっかりと何か当たったという衝撃があった。

「急に、開くんじゃねえよ」

痛そうに額を押さえながら、低い声で唸ったのは飯塚先輩だった。

「す、すみません」

どうしてここに、と言う前にまず謝罪。そうして顔を上げた飯塚先輩と目が合って、小ぶりの紙袋を押しつけられた。思わず中身を確認すると、同じく小ぶりのタッパーがいくつか入っている。

何か頼みごとでもしただろうか。そう思って飯塚先輩を見上げると、これでもかというくらい鋭い目で睨まれた。肩を竦めると、先輩の手が迷わず私の頬を捉えて引っ張る。それも思いつきり力任せに、だ。

「痛った、いたたたたた！」

開いている方の手で、抗議として飯塚先輩の手を叩く。

「飯も食わずに寝るなって何度言ったらわかるんだよ」

そこで手は離された。まだ少しひりひりと痛む頬を押さえながら、涙目で先輩を見上げる。

どうやら、この紙袋の中身は夕飯のおかずらしかった。

そういえば、以前にも何度か食事を抜いて怒られたことがある。

だがしかし、どうして先輩が私の行動を把握しているのか。それが甚だ疑問である。以前までは、大抵の人が食事の時間に散歩に出たからばれたのだ。もちろん、手ぶらで。だが今日に限っては、散歩にも出ていなければ部屋からも出ていない。

それなのになぜ、先輩は私の行動がわかったのか。

「……やっぱり食ってねえんだな」

ハツタリだったらしい。しまった、先輩の罠にかかってしまった。眉を潜めると、同じように眉を潜めた先輩が私を見下ろす。威圧感が半端じゃないということは、口に出さないのでおこう。

苦笑いで流そうとすると、軽く頭を叩かれてしまった。思わず落としそうだった紙袋をしつかりと握り直す。

「おーまーえーはー！ ここの部屋もちゃんと電子レンジあるか」

「あ、ありますよ、それぐらい」

そう答えた瞬間、先輩が手首を痛いくらいに強く握った。

それからズカズカと部屋まで上がり込むと、私が掴んでいた紙袋をひったくってキッチンに手際よく広げ始める。「皿、適当に使うからな」と言っけてキパキと要領よく動きながら、タッパーの中身を電子レンジに入れた。

ほどなくして、部屋にはいい匂いが充満する。さすが先輩、と思いながらも邪魔になるからと部屋の隅に立っていた。

本当に面倒見がいい。あんなことを離れたあとでも、結局気まずくなつたのはあの短時間だけだった。

「ほら、温かいうちに早く食っちまえ」

いただきます、と言って目の前に広げられた料理に手をつける。今日は和食だった。鯖の味噌煮と、肉じゃが。ご飯はきつと、キッチンに放置していたレンジで出来るものだろう。

本当はあまり食欲がなかったのだが、と思った。しかし手を付けてみればそうでもなくて、意外と箸が進む。その間、先輩はテレビを見ながらお茶を飲んでいた。

きつと特に暇だったとかいうわけではなく、私の為に時間を割いてくれている。それは、言われなくても何となく自覚はしていた。こんなことまでしなくていいですよと進言しようとしたのだが、自分の生活管理が不十分すぎて何も言えない。

私が食べ終わったのを確認してから、先輩は立ち上がってタッパを紙袋に詰めたものを持った。きつと、レンジやら何やらを使っている時に洗っていたのだろう。ぼんやりとしていたせいで、気付いていなかったのだが。

「生活管理ぐらい、自分で出来るようになれ」

何も言わずに頷けば、上からは呆れたようなため息が降って来た。

「お前、携帯出せ」

「え」

「ほら、早くしろ」

そう促されてケータイを出せば、先輩は素早い操作で自分のケータイとくっつけた。きつと赤外線通信でもしたのだろう。真っ黒なボディのケータイは、飯塚先輩に似合ういかにもなものだった。

ケータイを突っ返されてから、髪をぐしゃぐしゃと撫でられた。

「飯、作って欲しい時はメールしてこい。んで、時間送ったら部屋に来い。じゃあ、さっさと寝ろよ」

私の言葉も聞かず、先輩は扉を閉めて帰って行ってしまった。

呆然と立ちつくしたまま先輩の出て行った扉を見ていたが、我に返ってすぐにケータイを開く。

電話帳には、飯塚龍之介とフルネームで登録されていて。こんな些細なことなのに、どうしてかやけに胸が熱くなった。

「寿命が縮むかと思ったんだぞ」

名前を呼ばれた。

そんな気がして、重い瞼を持ち上げた。一面に広がるのは真っ白の天井と、点滴。鼻につくのは、病院独特の薬品の匂いで間違いない。体は思ったより重くて、起き上がる気にはなれなかった。

そうか、私は倒れたのだ。忘れていたことを思い出してから、ため息を漏らす。外は明るい。一体、私はどれほどの時間を眠っていたのだろうか。誰もいないから、それを聞くことすらできない。

それにしても、ずいぶんとまた懐かしい夢を見たものだと思う。飯塚先輩と共有していた時間の夢。そこは穏やかで幸せで、とても温かい時間の中だった。いつそ、このまま夢の中で永住したいと思うほどに。

そんなことが叶うわけがあるまい。それは重々承知のことで、あくまでも希望だ。こうあればいい。起きてくれない人を待つものだから、せめてあの温もりを忘れてしまわないように、夢の中でも長く触れていたい。

伸ばした手は、空を掴んで再びベッドに沈んだ。

「っ、遠藤……」

気付いた時には、もうその腕の中にすっぽりと収まってしまっていた。体を引き起こされて、腕を苦しいくらいに巻き付けられる。思わず苦笑してしまった。夢の中の温かさとはまた違う、あの人も少し体温の高い腕と体。

その体に、自分も同じように腕を巻き付ける気力はない。気力があつたとしても、私から巻き付けることはない。そうでもしてしまえば、飯塚先輩に会うときに迷いが生じてしまいそうで怖いのだ。

自我を守るために、私は自ら腕を回すことはない。

「真山先輩、ご迷惑おかけしてすみませんでした」

「本当だ。寿命が縮むかと思っただぞ。俺が、リュウに顔向け出来なくなる」

意地悪くそう言いながら、先輩は本当に心配してくれていたらしい。少しだけ、私を抱き締めている手が震えていることに気付いてしまった。人を失う怖さを、2度も味合わせてしまったのか。彼に先輩の寿命が縮むほど長い間、眠っていたのだろうか。当たり前だが、寝ていた当人なものだから全く自覚はない。それにケータイも見当たらなければ、カバンもない。カレンダーなんていうものもない。

ふと見渡してみれば部屋のいたるところにマンガや雑誌、本が置いてある。そういったところを見る限り、軽く2日は眠っていたのだろうか。今いるのは真山先輩だけだが、もしかするとみんないてくれたのかもしれない。

真山先輩がそつと離れて、私をもう一度ベッドに横たわらせた。ケータイを開いた。さすがに画面までは見えなかったけれど。ゆっくり操作してから、パソコンと音を立てながら閉めた。そして私の寝ているベッドの縁に腰掛けながら、ため息。

「……私、どれくらい寝てましたか」

その質問に、先輩は目を見開いた。それから少し眉を下げて、目を細める。

「今日で1週間だ」

今日で1週間。ということは6日と数時間。144時間と、少し。

そんなに眠っていたのか、と驚いた。人がそんなに長い間眠れるのか、と一瞬考えてしまう。だけど、私よりも先輩の方が長く眠っている。そう考えると、6日は短かった。

あれから1週間ということは、先輩はカウンセリングの日だったのか。だから、彼はこの時間にここにいるのだろう。それにあれから一週間ということは今日は土曜日。普通の大学生なのだから、みんなも用事くらいあるのだろう。

「はは、遠藤、呑気にしていいのか？ もうすぐだぞ」

何が、と言いかけて口をつぐんだ。わかってしまったのだ、真山先輩の発した言葉の意味が。パタパタと早足に廊下を歩く音が響いている。その音を聞いて、思わず固まった。私は、この足取りの音をよく知っている。

その足音は私の病室の前で止まる。そして、ゆっくりとコンコンと控えめなノックが響いた。返事をしなくてはいけないと思いをいせせば、1週間ぶりだからか掠れて声が出なかった。再度振り絞れば、裏返った。最悪だ。

ガラリと引き戸を引いて、入ってくるその人物。笑顔なのに、その顔はやはり怒っていると感じとれた。思わず作り笑いもできずに口元を引き吊らせてしまう。クリップボードを持って、ベッドサイドにあつたパイプ椅子に静かに腰かけた。

「か、加賀見先生……」

何かを話すより、まず飲み物が欲しい。

視線を冷蔵庫へとやると、それに気付いたのか真山先輩がペットボトルを取り出してくれた。水。それを小さなプラスチックの急須型に入れ物とコップに注いでくれる。あの急須形に入れ物の用途がわからない。

ぼんやりとその動作を眺めていたら、真山先輩がコップを加賀見先生に差し出した。それから、もう1つのコップは自分の方へ引き寄せる。そしてその急須形の入れ物を片手に、真山先輩はがっちりと私の顎を掴んだ。

何が何だかわからずに、目を見開く。先輩は笑いながらその急須形の入れ物の先を私の唇に押し当てた。

「口、開けてくれないか」

恐る恐る口を薄く開けば、ゆっくり急須が傾けられた。小さな急須の口から、少しずつ水が流れ込んでくる。やっと喉が潤って、先輩の服を掴むと急須は口から離れていった。

「いまは衰弱してるから、起きる体力ないだろ。なら水飲みだと楽だと思っただ」

どうやら、小型急須は水飲みというらしい。それにしても、私は起き上がれないくらい衰弱して、体力がなくなっていたのか。というか、その衰弱した人物を起きて早々に引き起こしたのは誰だ。

でも、まあ。

彼はここまでずいぶんと気を遣ってくれていたようだし、まだってちゃんと気遣ってくれている。だから、あの時ばかりは致し方ないことだと水に流しておいた。100の優しさを比べると、1の失敗なんて小さなものだ。

真山先輩がリモコンでベッドを起こしてくれたのを合図に、加賀見先生の仕事が始まった。その間に、真山先輩が私たちに口を挟むことはないのだろう。静かに息を吐き出してから、私も聞く体勢に入った。

「千早ちゃん、いくつか質問するからちゃんと答えてね？ 嘘偽り

なくよ？ 答えなくて今度また倒れたりしたら、ぶっ飛ばすわよ？」

明らかに、先生の言う言葉ではない。そう思ったが、何も言わずに頷いた。ここで反抗する気もないし、何より悪かったのは黙っていた私なのだから。大人しい私を見て納得したのか、先生はクリップボードに目を落とした。

小さく唸って手を握ると、真山先輩の大きな手が上から重なった。見上げると、心配したような憂いを帯びた目で私を見下ろして、何も言えずに顔を伏せれば、今度は加賀見先生からの質問が飛んできた。

それはいつものカウンセリングで聞かれることと同じことや、時には違うものも。そして意味合いの似たような質問もいくつか織り混ぜて。他にも無気力やめまい、頭痛や疲労感のことは自分から話しておいた。

だいたい、二十問ほどのやりとりだっただろうか。終わったのは、十分ほど経ったところだった。時々、先生は眉を寄せたり苦虫でも噛み潰したような顔をしていたが。終わったところには、無表情になっていた。

加賀見先生はしばらく黙ったまま、クリップボードの紙にガリガリと何かを書き込んでいた。それから、突然立ち上がるといつもの笑顔で言い放った。

「検査結果は、後で伝えに来るわね。真山くんも、ちゃんと休みなさいよ」

すぐそこに座っていた真山先輩は苦笑いを溢しながら、小さく頷いた。

検査だったのか、と思いながら加賀見先生を見送った。先生が出て行ったのを確認するなり、真山先輩はコップを煽って立ち上がる。水飲みは私の手の届くところに置いてあるものの、いまは手を伸ば

す気力もない。

1週間ぶりだというのに、空腹感は全くない。自分ではつきりと感じたのは、喉の渴きや微妙な頭痛だけだった。もしくは体の節々の痛みだったり、動きたくないという無気力感だったり。ため息を吐く気はないのに、自然と口から溢れる。

真山先輩はいつからここにいてくれたのだろうか。こちらに背を向けている彼の服の裾を掴むと、驚いたようにこちらを振り返った。それから柔和な笑みを見せて、再びベッドの縁に腰かける。

その目元に隈があるのを、私は見逃さなかった。本人はバレていないつもりなのだろうが、バレないわけがない。心なしか、痩せた気もするのだが。いや、あの事件以来、先輩はどんどん痩せていったか。

痩せたというよりは、やつれたという表現が正しいのかもしれない。そう思いながら、彼の服の裾を掴む力を緩めなかった。とはいえ、病人だ。そんなに強い力でなかった。

「どうした、水でも飲みたいのか？」

「先輩……いつから、ここにいてくれたんですか」

その質問に柔和な笑みを崩して、小さなため息が漏らされる。それから彼は静かに指折りで数えて、か細い囁くような声で「時間を合わせると3日分くらいか」と言う。3日。それは多すぎるほど、傍にいてくれたということ。

道理で、彼の目元に隈があるわけだ。大学の課題で時間がままならないなどと言っていたのに、そこまで自分に時間を費やしてくれていた。そう思うと、どうも申し訳ない気持ちで一杯になる。

「気にするな。俺よりも、桐島と宮村の方が長かった。上村と江藤と雅も、2日に1回くらいは来てたしな」

由利と、玲奈。というよりみんな、時間を割いて来てくれたんだ。それが嬉しくて、どうしようもなくいとおしく感じてしまう。私が思っていた以上に、人間関係というものは捨てたものじゃなかったらしい。それをいま、ひしひしと思いしらされた。きつと、飯塚先輩に教えてもらったこととはまた違う。友情というやつか。あまり意識したことがないから、やけにそういったことが照れ臭く感じるのだが。胸が温かくなるような思いだ。熱が込み上げてくる。

真山先輩はそれに気付いたのか、気付いていないのか。私は、きつと後者だと踏んでいるのだが。水飲みに水を継ぎ足して、また机の上に置いておいてくれた。コップにも水を継ぎ足す。

目を細めて私の前髪に触れながら、小さな息を吐いた。先輩がどんな気持ちで、お見舞いに来てくれていたのかはわからない。それでも、多大な心配をかけてしまったのは目に見えてしまった。

「そつだ、何か食べるか？ さっき、ヨーグルトとか買ってきておいた」

かぶりを振れば、真山先輩は小さく笑って冷蔵庫に伸ばしていた手を引つ込めた。それからゆっくりと窓の縁に腰掛け直し、コップをあおる。お互い、特に何をすることもなく黙りこむ。でも、嫌な沈黙ではなかった。

しばらくすると、先輩はベッドサイドからリモコンを掴み取る。それについている赤いボタンを押すと、目の前にあつた壁掛けのテレビが見ついた。ぱっ、ぱっ、とチャンネルが変えられていく。それを見ていたら、ぐらぐらと世界が揺れる。

目を瞑つて、なるべくテレビを見ないようにしておいた。やっと気に入った番組を見つけたのか、先輩はチェストにリモコンを置いた。それからぼんやりとテレビを眺めている。特に声をかける気もないので、別にいいのだが。

しばらく、苦しくもない沈黙が流れていた。

しかし、それを破ったのは私たちのどちらかではなく、賑やかな声だった。バン、と扉が勢いよく開き、そろそろと団体で部屋に押し掛けてくる。嫌ではない。むしろ、ありがたいと思うくらい。目を細めると、隣で先輩が笑った。

「真山先輩の特等席なのよ」

由利と玲奈が泣きそうな顔をして駆け寄って来てくれるものだから、不謹慎にも笑ってしまった。こんなに大切に思ってくれる人がいるのはありがたいことだ。だから私も、同じくらい大切にしなければならぬ。

「千早ちゃん、大丈夫？」

「心配、したんだから……！」

「うん、ごめんね。でも、もう大丈夫だから」

へらへら笑うのもどうかと思ったが、口元が緩むのだから仕方あるまい。後ろにも泣きそうな顔をした健太や、安心したような顔をする雅先輩や江藤くんがいた。だが、3人ともいまは割り込んでくる気はないらしい。

由利や玲奈を落ち着かせてから、まだ詳しい検査をしていないことを話す。とりあえず受けたカウンセリングの結果とやらも、まだ受けてはいない。しどろもどろになりながら説明をしていたら、真山先輩もフオーしてくれた。

それに納得したのか、落ち着きを取り戻し始めた由利はパイプ椅子に座る。真山先輩以外は、みんなパイプ椅子やら窓の縁なんかには腰掛けた。どうやら、真山先輩はベッドの縁から動く気は全くないらしい。

私の考えていることを読んだのか、由利はにやりと笑って言った。「そこ、真山先輩の特等席なのよ」と。

それに動揺したのか、真山先輩が眉を寄せて違つという。まあ、どちらでも構わないのだが。

「遠藤先輩、起きてから何か食べました？」

江藤くんが立ち上がった、冷蔵庫へと向かう。かぶりを振った私を見て、取り出したのは先輩が言っていたヨーグルトだった。しかも、私の好きな苺入りのもの。

食べたくないと言おうとすれば、雅先輩がベリツとアルミの蓋を開けてしまった。真山先輩は苦笑しながら、近くにあったスプーンを手に取って袋から出す。

『食べなければいけない』状況下で『食べたくない』とは言えるはずもなく。

一番近くにいた真山先輩がヨーグルトを掬ったのだが、私に食べさせるのを由利が断固として譲らなかつた。理由は薄々わかつていたので、真山先輩も誰も、由利を咎める人はいなかつた。もちろん私も、何も言わなかつた。

そんなこんなで、食べさせてくれたのは玲奈だつた。少しずつ掬っては、ゆつくりと丁寧な動作で食べさせてくれる。このペースなら、食べるのも苦にならないと感じた。

そうして時間をかけて全てを食べ終えると、玲奈は氣遣って水まで飲ませてくれた。江藤くんはゴミを片付けてくれて、食べている間に出ていった由利と健太は水を買に行ってくれている。

真山先輩と雅先輩は、待ちきれなくなつたのか「加賀見先生のところに行ってくる」と言つて部屋を出て行ってしまった。だから、いま部屋にいるのは玲奈と江藤くんと3人だけだ。

「由利ちゃんと健太くん、千早ちゃんが倒れた日は病院に泊まつたんだよ」

「それ、宮村先輩も一緒に泊まつてたじゃないですか」

玲奈の一言に、江藤くんが横槍を入れた。まさか、そこまでしてくれていたなんて知らなかつた私は目を見開く。由利と玲奈、それに健太まで泊まつてくれたのか。そう思うと、なんだか申し訳ない

気持ちになる。

それに気付いたのか、玲奈は慌てて首を振る。きつと、私のせいじゃないと言いたいのだろう。しまった、とあからさまに顔を歪めた江藤くんが「いまのは忘れてください」なんて平然と言うから、思わず頷いてしまった。

真山先輩と健太と江藤くんは、さすがに泊められないと由利が言ったらしい。そういうところでは本当に、きつちりした子なのだ。3人が帰るときに、雅先輩には監視をお願いしたのだとか。勝手にこっちに来ないように。

私自身、そんなことが怒っているとは露知らず。ずつと眠って、しかもいい夢を見てしまっていたのだが。あの夢の中に住めるのなら、一生住みたいとすら思ったというのは内緒にしておこう。

「水、買ってきたよ」

ガサガサと袋の音を鳴らせながら、由利と健太が帰ってきた。その中には水とお茶が数本、リンゴジュースが数本入っていた。もちろん、私は水。きつと冷蔵庫の中を確認して、みんなの分も買ってきてくれたのだろう。

ここにいるのは、気の利く、優しい人たちばかりだから。

江藤くんがお茶、健太と由利と玲奈がリンゴジュースを取った。水は水飲みに入れてくれて、余った分は冷蔵庫へと入れてもらう。真山先輩と雅先輩はお茶。残りのお茶を冷蔵庫に入れて、由利はパイプ椅子に座った。

「先輩たち、遅いね」

ぼつりと玲奈が呟いた。確かに、結果を聞きに言っただけにしてはずいぶん遅い。遅すぎるほどだ。それでも、誰も何も言わなかつ

た。それに先輩が2人で行って来てくれているのだから、そう心配することもない。

他に何か話があったのかもしれないし、きつと迎えに行かなくても大丈夫だろうと。自分の容態が悪いとか、そういった話ではないだろうと思っていた。その時までは。

先輩たちが病室まで戻ってきたのは、それからすぐのことだった。真山先輩が車椅子片手に入って来るなり、眉間にしわを寄せながら「今からカウンセリングルームに行くから、乗れるか」と言われ。もう起きてしばらく経つのもあつてか、体は重いだけで動きつつある。サイドから由利と玲奈に助けてもらって、車椅子に座る。初めての車椅子の経験が、果たしていいのか悪いのかはわからない。

「私が車椅子押します。実習で慣れてるから」

きつと真山先輩では不安なのだろう。看護師志望の由利が立ち上がった。それを苦々しい顔で受け止めて、それでも素直に交代するのは真山先輩の器の広さだろうか。健太ならばきつと意固地になりながら、大丈夫だと言っただろうと頭の隅で考えた。

真山先輩は雅先輩に何かを耳打ちしてから、由利に声をかけた。やはり、何かあったのだろうか。カウンセリングルームに向かう最中で話しているのは、私と由利だけ。先輩もわかる話をしていたが入ってくることはなかった。

カウンセリングルームの前で、腕組みをした加賀見先生が立っているのを見つける。私が声を出すと、真山先輩は小さく頭を下げた。下げたというよりは、頭を垂れたに近いのかもしれない。先輩は何も言わずに私の頭を撫で、悲しそうに笑った。

「はい、向こうの部屋で話すからね。真山くん、先に行ってくれん？」

小さく頷いた真山先輩が、足早に一番奥の薄暗い部屋に消えてしまった。由利は私の車椅子を押しながら、加賀見先生の指示通りの部屋に向かう。由利も話を聞くのだろうか。彼女だから、私のことでも胸を痛めそうで怖い。

真山先輩が消えた部屋のプレートには、何も書いていなかった。しかも、他の部屋から随分と離れた位置にあるからか薄暗い。部屋の中も大した明るさではないことが、小さな窓からは見て窺えた。加賀見先生が扉を開けて、私たちを誘導してくれる。だが、入った瞬間に由利の足が止まったのだ。

思わず、目を見張った。息が詰まったように呼吸が苦しくなる。

あ、とか、え、とか言葉ではない単語だけが自然と口から洩れて出ていた。

「いつ起きてくれるんでしょうね？」

部屋は、街だった。

…そこは紛れもなく私が倒れた場所であり、飯塚先輩が刺された場所。

真山先輩が後ろ向きに立っていて、私たちに背を向けていた。嫌な汗が、身体中から吹き出ている。ぱたぱた、と顎を伝った汗が落ちた。苦しい。目がチカチカしているかのような錯覚に陥る。

思い出すのは、あの日のあの瞬間。あの場面。泣きながら飯塚先輩を抱える私と、立ち尽くす真山先輩。聞こえる悲鳴と、救急車を呼ぶ人たちの切迫した声と。

「……や、っつ……」

手が痙攣を始めた。止まって欲しいのに、止まらない。汗も止まってくれない。ぼたりと落ちた汗が、床に模様を作っていく。ちやんと言葉に出来なくて、単語だけが口から滑り出た。

真山先輩、真山先輩。そんなどこにいちやだめですよ。やめてください。死んじゃうかもじゃない？ いまは、何も無いのに？ 怒らないっていう確証はないじゃないか。絶対なんてありえないこと。

「千早、千早っ……!!」

「ここから、出しましょうか。真山くんも」

由利に揺さぶられる。それでも痙攣は何も変わらず起こり続けている。汗も止まる兆しなんて見せない。見兼ねた加賀見先生が、小さな声でそう言った。

部屋を出てから、徐々に痙攣も汗も感情も落ち着きを見せてきた。大きく深呼吸を繰り返す。真山先輩は俯いたまま、タオルを由利に渡してくれた。

ああ、そうか。

さつき感じた既視感は、あの事件の日だ。真山先輩が私に背を向けた時。彼が犯人を目で追っていた時の背中だったのだろう。あの時と、彼の背中と同じだった。だから、やめたと願ってしまったのか。

「PTSDって、知ってるかしら？」

PTSD。聞いたことがあるが、それ以上のことはよく知らない。カウンセリングルームに入るなり、もう既に冷えたお茶が用意であった。当たり前のように、私の分は水飲みに入れられている。由利が気を利かせて、それを飲ませてくれた。

「外傷後ストレス障害。それが略してPTSDなの。千早ちゃんは、きつとそれよ」

今は、試したということなのだろうか？ 私を。

加賀見先生は眉間にしわを寄せながら、苦しそうに息を吐き出した。由利はタオルで汗を拭いてくれながら、黙って話を聞いているようだ。真山先輩は既に聞いていたらしく、大きな反応はなかった。あの事件を繰り返し夢で見る。その度にパジャマが汗でぐっしょりと濡れていて、動悸もひどい。不眠症かと思っていた睡眠不足も、無関心、集中力の無さは全てその症状に当てはまるらしい。

痙攣は、よくわからないがてんかんだと言われた。これもまた、外傷後ストレス障害によくある症状だとか。その中でも私は比較的軽度なものらしく、気を揉まなくていいと教えられた。念のためと薬も出されたが。

真山先輩は力無く椅子によりかかりながら、深いため息を吐いた。

それを見た加賀見先生はケラケラ笑いながら、励ますように彼と由利に声をかけていく。

「千早ちゃんの症状は、アンタたちが側にいる限りは悪化する心配ないわよ」

私も、そう思う。

先輩や由利だけじゃない、みんなが私を支えてくれているから。きっと、それがあつる限り何度でも立てる。いつまでも甘えるのはだめだろうとわかつてはいるけれど、やはり助けてもらえないと今は立てそうもない。

「よし、真山くん！」

「……はい」

「ずいぶんと辛気臭い顔してんのね。飯塚くんのところに、千早ちゃんを連れてってあげたらどう？」

加賀見先生がニヤリと悪い顔を見ると、由利も同じような顔をして車椅子を押した。とは言っても、真山先輩に向かつてなのだが。困ったようにしていた先輩も、苦笑しながら車椅子を押す。

「止まる度に、ちゃんとロックかけてくださいね」という由利の言葉を受け流して、私たちはカウンセリングルームを後にした。

さすがに、今すぐに飯塚先輩に会いたいわけじゃないからと由利は着いて来なかったが。それは建前で、きつと気を遣ってくれたのだろう。人の心に聴いから、と笑えば真山先輩も納得していた。

「それにしても、ロックつてどこにあるんだ」なんて呟きながらエレベーターに乗り込んだ。少々不安はあるが、真山先輩なので大丈夫であるうと願った。

飯塚先輩に会うのは、実感はないが一週間ぶりになってしまった。

部屋の前につくなり、すぐに真山先輩が扉を開けてくれた。それから飯塚先輩のベッド横でロックするなり、ちよつと荷物取つてくと告げて足早に部屋を出て行ってしまったのだ。それが、真山先輩なりの優しさだということはもちろんいぶん前から知っている。

私は久々に飯塚先輩の手をとつて、温かさ確かめた。先輩は生きていたのだと、そう実感する。ちゃんと生きていて、いつかは帰ってきてくれるのだ。そのいつか、隣は私でなくてもいい。生きてさえくれていれば、それでいいのだ。

きつと由利が私の立場だったなら、絶対に嫌だと言つのだろう。そして周りから見ている立場として「先輩が千早を見放すことなんてありえないわよ」といつものように飄々と言つのだろう。想像して、思わず笑ってしまった。

「あと数日だけ入院するみたいです、私。一週間も寝てたとか、自分では全然わかりませんよね」

ふは、と笑つた。先輩が起きることも、ぴくりと動くことさえない。でも、今の先輩だとそれは当たり前のことなのだから仕方ない。しっかりと手の温もりを分け合いながら、私は起きることのない彼にひたすら話し続ける。

「先輩は、いつ起きてくれるんでしょうね？」

ぼつりと溢した言葉。あれから一週間して、私が倒れて一週間。だから合計二週間。約、半月ほどだろうか。

事件があつたのは、今月。九月の、四日だ。今日は十八日。ずいぶん経つたよな気もするし、それでもないよな気もする。何せ私は一週間も寝ていたわけなのだし、短く感じるのも道理だろう。

「目が覚めたら、まずはリハビリですよ。じゃあ、しばらくは入院生活かー」

私を庇って刺されたのはお腹だ。担当の先生には、相当なりハビリが必要だと言われた。私を庇ったりするからじゃないですか、と皮肉めいて言い続けたのは一週間前までの私。

今は違う。ちゃんと、香子さんに教えてもらったから。

先輩が目を覚ました時は、ちゃんと一緒に手を取ってリハビリの手伝いをしたい。先輩が回復していく姿を、近くで見て応援して、一緒に喜んだり悲しんだりしたい。

それに何より、失ってしまった二人の空白の時間を埋めたいのだ。空っぽに、空いてしまった私たちの時間。それを取り戻して、一つ一つを大切にやり戻して行きたい。

「退院したら大変になりますよ。私と真山先輩のご飯作ってもらわないと」

そんな話をしたら、お腹空いちやうからやめた。

そうおどけて笑っていたら、ガラリと扉が開く音がする。真山先輩が帰ってきたのかと思って振り返れば、そこには思わぬ人が立っていた。

ぼかんと口を開けたまま、何も言わずいるとその人物は入って来るなり私の頭を叩いた。パソコンと小気味のいい音が鳴って、頭が揺れる。それでもたくさん溢れ出てくる中から言葉を選べなくて、何も言わずに固まったまま。

いい加減に痺れを切らしたのか、その人物はため息をゆっくり漏らした。

そして、腕の中に私をすっぽりと収める。あやすかのようにリズムよく背中を叩いてくれるからか、思わず涙が零れ落ちてしまった。

「じゃあ、心配しなくても大丈夫だ」

「……花菜ちゃん」

義理（とは言っても書類上では実母だ）の、肩書だけの母親。母親というよりは、良き姉のような優しい人だ。初めて会った時から呼び名はずっと《花菜ちゃん》のままなのである。そんな花菜ちゃんが私を叩いたのは、初めてで。

「……何回も見舞いに来てくれてたんだ」

その後ろから、真山先輩が姿を現した。きつと、ここまで連れてきてくれたのは先輩なのだろう。何回も、という部分を強調しながら話してくれた。

一週間前に花菜ちゃんに連絡が行って、ほぼ毎日のように通ってくれていたらしい。祖父母は歳で、もう頻繁に出歩けるような歳ではない。でも花菜ちゃんも《代わり》ではなく《心配をして》来てくれていたのだ。それが嬉しかった。

花菜ちゃんには真山先輩たちが全て話してくれていたらしくて、特に私から何を話すこともなかった。飯塚先輩を見るなり、すぐに泣きそうだとわかるほど顔をくしゃりと崩す。それから何度も何度もお礼を繰り返した。

ちいちゃんを、妹を、助けに来てくれてありがとう。庇って守ってくれて、本当にありがとう。

少し濡れた声で、ひたすらに繰り返す。一日でも早い回復を祈っています、と付け足してから花菜ちゃんが私と差し向かって笑った。ゆっくりと頭を撫でてくれて、思わず目を細めてしまう。

「いい彼氏持ったね」

「……うん」

「早く目が覚めるといいね」

「……うん。もうすぐだよ、きつと」

きつと、もうすぐすると先輩は目を覚ましてくれるだろう。そしていつもの仏頂面をしながら、私を怒る。だからもうブーツは履かない約束でも交わしておこうか。想像しただけで、笑ってしまった。それをその場にいた花菜ちゃんと真山先輩に、つらつらと話す。やっぱり二人もおかしそうに笑って、真山先輩に至っては「本当にそうなりかねん」とまで言うほどだ。

泣いてないですよ、私。心の中で小さく呟いた。もう泣いてないです。飯塚先輩が起きた時に、私が叱咤激励をくれてあげるためにそれくらい、私は飯塚先輩のことを信じているから。

きつと、真山先輩だって。私と同じくらい、落ち着き払っている。私より前から、ずっと落ち着き払っていたけれど。でも、それほど飯塚先輩が帰って来ると信じているということなのだろう。

待ってますからね、としっかりその手を掴んだ。

あの時は冷たかった手が、今はこんなにも温かい。だから、大丈夫だ。先輩はちゃんと帰ってきてくれる。確信なんてないはずなのに、それにはあまりにも自信があった。

「そつか。じゃあ、心配しなくても大丈夫だ。ちいちゃんは昔から、嘔吐かないから」

につこりと笑って言われた言葉に、真山先輩も笑ったのがわかった。そうだとは言わないが、きつと彼もわかってきているのだろう。これは事実でもあるが、花菜ちゃんりの励ましなのだということもわかっている。

でも本当に、飯塚先輩は絶対に目を覚ましてくれるだろう。せめてクリスマスまでには、と心の中で祈る。去年のクリスマスは学生マンションのみんなと祝った。だからこそ、今年は二人で過ごす時間も欲しいと思っていた。

だから、せめてクリスマスまでには。目を覚まして、病院でもいから一緒に過ごしてきたいのだ。それは、あの事件の前から先輩と約束をしていたこと。先輩も、嘘をついたりしない。だから、絶対に目を覚ましてくれると信じていられる。

「リュウは、遠藤のためならすぐにも起きてくるんじゃないか」

ふは、と笑った真山先輩に頭をかいぐられた。そうですかねえ、なんて言っていたら花菜ちゃんも隣で肩を揺らせていて。

「本当にいい彼氏なのね。ちいちゃんを幸せにしない人だったら、翔真に追い返してもらおうのに」

「花菜ちゃん、それ冗談に聞こえないよ。翔真くんならやりそうだもん」

翔真くんというのは、花菜ちゃんの旦那さん。肩書きでは私の実父ということになっている。だが、彼もまた私にとっては歳の離れた兄のような存在だ。仕事があるのでなかなか会えないが、仲がよいことには変わりない。

兄のように慕ってはいるが、翔真くんは兄としても父としても可愛がってくれている。後で花菜ちゃんから聞いた話では、お見舞いに来られなかったことをずいぶんとへこんでいたらしい。

気にしないでいいと伝えておいて、と頼んだが翔真くんなら無理にでも仕事を片付けて来てしまいそうだ。そう思って『すぐに退院するとも言っておいてね!』と付け足しておいた。花菜ちゃんは苦笑しながらも頷いてくれた。

花菜ちゃんはその後すぐに帰って行ってしまった。どうやら、翔真くんのご飯も作らずにお見舞いに来てくれたらしいのだ。笑顔で『またご飯食べにおいで。いつか飯塚くんも連れておいで。お父さんと翔真をへこませてやろう』と言っていた。

真山先輩はそれを聞いて苦笑していたけれど。それから私たちもすぐに病室に戻ることにした。花菜ちゃんと翔真くんの話をすると、長いのに真山先輩は根気よく全て聞いてくれる。時々相槌をうつてくれた。

そういえば、真山先輩たちには詳しく自分の事情を話したことなんてなかった。私が話したのは、飯塚先輩だけ。飯塚先輩も、真山先輩と同じように静かに聞いてくれていた。今はその心地好さどこか似ているような気がする。

さすが幼馴染みとでも言うべきなのだろうか。どことなく飯塚先輩に雰囲気似ているのは、否定できない。だからこそ、頼れるのかもれないということは胸の内に秘めておこうと思った。

飯塚先輩の不器用な優しさと、真山先輩の素直な優しさはまた違う。これは一緒にしてはいけないような気もするから。それは、一人一人の人格。違うのは当たり前のこと。今の私にとっては、どちらも大切だと言い切れる。

「……………千早、聞いた。雅サンと由利から」

気まずそうにした健太。隣では俯いた玲奈と、悲しそうに眉を下げた江藤くんは立っていた。雅先輩はそっぽを向いていて、由利は呆れたような顔。きつと、それなりにわかっていたからこそ落ち込

むことはない。それに、私が元気だとわかっているからもあるはずだ。

「うん、心配かけてごめん。でさ、一個だけお願い聞いてくれる？
由利も玲奈も江藤くんも、雅先輩も真山先輩もみんな」

にこりと笑うと、目を丸くした玲奈と江藤くんが私を見た。健太も同じように目を丸くして、我に返るなり何度も頭を振った。雅先輩はゆつくりとこちらを向いて、ああ、と短い答え。

真山先輩と由利は、もうすでにわかっているように笑っていた。私らしくないことはわかっている。お願い、なんて。普段は絶対に使わない言葉を使う。それが珍しいのだろう。誰も口を挟む人はいなかった。

「色々と迷惑をかけると思っけど、その時は助けて欲しいと思って私は、自分で思ってたより弱かった。助けがないと出来ないことが、想像以上にありそうだから。その時はまた……よろしくお願いします」

ゆつくりと頭を下げると、誰かが鼻を吸る音が沈黙に包まれている部屋に響いた。ぱつと顔を上げてみれば、玲奈が抱き付いてくる。続いて由利にも抱きしめられた。二人とも泣いていて、何も言わない。

顔を背けている健太も、下を向いている雅先輩も、同じように肩が揺れていた。ただ真山先輩と江藤くんだけは、静かに笑っていて。そんな真山先輩が「当たり前だ」と穏やかな声色で言ってくれた。それに続くように、みんな頷いたり賛同の声を上げてくれた。

どうにかなる気になってしまう。きつと、本当になんとかなくなってしまっのだろう。

「飯塚先輩は、もうすぐ起きてくれますよ。ねー、真山先輩」

「ああ。遠藤が入院したって言ったら、きつと怒るんだろうな」

それを聞いて、健太が押さえた声で笑った。健太だけではない。

他のみんなも、声を殺しながら笑っていた。それに拍車をかけるように「言わないでくださいよ！」と言った私の言葉にまた、みんなが笑っていた。

「飯塚先輩なら、心配しすぎて千早のこと部屋で飼いそうだよな」

くすくすと由利が笑う。

「ちよつと、由利、飼いそうって何!」

「アンタは飯塚先輩のペットみたいなもんじゃない。現に餌付けされちゃってるし」

確かにそうだけど、と言葉に詰まった私を見て、また笑い声が部屋に響いた。健太に関しては、もう隠そうとすらしていない。江藤くんはかるうじて、顔を背けて口とお腹を押さえて軽く前屈みになっていた。

みんな、思っているところは同じらしい。私は飯塚先輩に『飼われている』のだと。彼女よりもペットと見られているとは、一体どういふことなのだろうか。眉を潜めていると、真山先輩が笑いながらだが教えてくれた。

「リュウが、それぐらい大事にしてるってことじゃないか」

それなら、いいんだけど。

飯塚先輩が私を大切にしてくれていた、というのをわかっているのはみんな同じだ。特に真山先輩がずば抜けてわかっているだけで、

飯塚先輩の不器用な優しさは私に向けられるとそれはもう凄いらしいのだ。

一番わかっていなかったのは私なのだと、以前由利にさんざん怒られたことがある。健太や玲奈に関しては「飯塚先輩が不憫でならない」と白い目で見られた。そこまでじゃないでしょ、と否定していたが今はわかる。

私は、ちゃんと飯塚先輩に大切にしてもらっていた。

「……そろそろ面会時間が終わるな。帰るか」

そう言ったのは雅先輩だった。ぺこりと頭を下げると彼女は今まで見たことないくらいに柔らかく微笑み「いつでも頼ってくれて構わない」と言ってくれた。その言葉には溢れんばかりの優しさが込められているのだろう。

「じゃあ、またねっ」と由利。

「またも来るね」これは玲奈だ。

「早く寝とけよ！」健太もね、と切り返してやった。

「お大事に」江藤くんは良い子だと思う。

「安静にしておくんだぞ」意外と、雅先輩も心配症なのではないかと思う。

「明日も、顔出す」真山先輩は、悲しそうに笑った。

それぞれに言葉を残して、みんなは病室から出て行ってしまった。それを見送ってから、自力で立ち上がってベッドに潜り込む。やっと体力が戻って来て、少し安心した。

ふと、考える。

私は、飯塚先輩をちゃんと大切に出来ていたのだろうか、と…。

「じゃあ、心配しなくても大丈夫だ」(後書き)

実は…という話を活動報告に載せました。

以前の物には1つだけ裏話を載せてあります。

目を通して頂ければ幸いです。

これからもよろしくお願いします。

「負けてちゃダメなんですよね」

よくわからないけれど、私が楽しかったのは確かだ。でも、飯塚先輩は普段そういったことを絶対に口にしない。幸せなんて以ての他で、楽しいとすらも言わない。それってどうなんだ、とは思ったのだが。

それが飯塚先輩なのだから仕方ないと割り切れるし、何より彼に感情をハッキリと言われてしまったら却ってむず痒いような気持ちになる。言われたら、言われたらで「先輩大好きです」と飛び付ける自信はあるのだが。

以前に飛び付いた時には真山先輩も一緒にいて、思い切り叩かれたことを思い出す。それから、先輩の口癖である「おーまーえーはー！」という低い声で、膝詰めで怒られた記憶もしっかりと残ったままだ。

苦笑して、テレビの音量を上げた。ブラウン管の向こう側では、ラブストーリーが繰り広げられている。三つ巴のようなその話を理解する気力もなく、プツリと切ってしまった。

人生、そう上手くいくものではないのだと思ひ知らされたのだ。だから、もう飯塚先輩が起きるまでは「起きて欲しい」以外の何も祈りようがない。起きて欲しい。せめて元気でいてさえくれれば、もうなんだったっていいのだ。

「……千早ちゃん、ちょっといいかしら。加賀見です」

ノックの音がして、返事をする間も開けずに豪快に扉が開いた。そこからひよっこりと顔を出した加賀見先生は、にっこりと笑ってベッドサイドの椅子に腰かける。その手には相変わらずクリップボードが握られていた。

リモコンで付いたままのテレビを消して、冷蔵庫からパックのお茶を二つ取り出す。それを机に置いて差し出すと加賀見先生は穏やかに微笑みながら、ありがとう、とだけ言った。

時計はもう十時を指そうとしている。それなのに一体、こんな時間に何の用があったのだろうか。ちよつと体を起こして体勢を整えると、クリップボードを見せられた。

一番上には九月四日にあった、あの事件の新聞の切り抜きが挟まれている。私は、この事件の詳細を知らない。犯人の名前も歳も、犯行動機も何も知らなかったのだ。それどころか、新聞に載っていたことすら知らなかった。

加賀見先生は苦笑しながらその記事をバインダーから抜き取る。私の前に滑らせて、ぽつりぽつりと話し出した。

「殺したいとか、憎いとか思っちゃだめだと思ってね。しばらく見せないつもりだったのよ」

でもあっさり真山くんに見つかっちゃって、なんておどけた風に言う。真山先輩は、一体いつから知っていたのだろうか。私にこれを見せようと進言してくれたのも、真山先輩なのだという。

加賀見先生がなかなか折れなかったこともあって、今日まで引き延ばしになっていたらしい。今日の私たちが知らない間に、真山先輩はまた進言してくれていたのだ。あまりの押しに弱った加賀見先生が、つい条件を出した。

それが、あの実験へと繋がっていたのだ。

「強くなったから見せてやってください！ って必死だったの。遠

藤には知る権利がありますとか言っし」

本当に、真山くんて生意気なのよねえ。と口調が砕けてきている加賀見先生。その話を聞きながらも、視線が新聞の記事から離れることは全くない。そこには驚くような文字が連ねられていた。

泣きたくなつた。

どうして？

まだ、まだ飯塚先輩は起きてくれていないのに。それなのに、あの犯人はのうのうと普通に生活しているのか。どうして罪に問われないのか。理由は、ちゃんと記事に淡々と記されていた。短く、簡潔にまとめられていた。

『犯人には、精神鑑定にて異常が見られたので罪に問われなかった

…』

そんなことがあっていいものか。精神異常があったからと言って人を殺傷したことに変わりないというのに。それなのに、たったそれだけの理由で捕まえられないの？

私の反応は目に見えていたとでも言うように、加賀見先生は深いため息を漏らした。それから記事を取り上げて、再びバインダーに挟んだ。身動きすら出来ずに、ただ呆然とすることしかできない。てつきり、犯人はもう既に罪に問われているのだと思っていた。

思い込んでいた。それなのに、釈放されていたなんて。思いもよらない結末に、開いた口が塞がらないような状況になってしまっているのだ。

「おかしいって、私も思ったわ。それでも、私たちは何も出来ないのよ」

加賀見先生の言葉が、胸に深く深く突き刺さったような気がした。

いや、突き刺さったのだろう。私たちは法などに関しては無力だ。そんなことは、もうずっと前からわかっていたはずなのに。

無力で、どうしようもないという事実を突き付けられると何とも言えないもどかしさに襲われた。まだ飯塚先輩の目は覚めないし、亡くなった人たちもいる。それなのに精神喪失の理由だけで、無しにしてしまえるのだろうか。

「飯塚先輩は、亡くなってないから無念じゃないです。それでも、亡くなった方の遺族はそれで納得するんでしょうか」

法は時によつて残酷だということを、ひしひしと伝えられてしまった。

自分は被害者と繋がりがあからこそ、残酷に思える。許せないと思えるのだろう。だが、加害者と繋がりがあればどうだろうか。人を殺してしまったのに刑に処されないで済む。それはいいことなのだろうか。心から、よかったね、と。本当にそう言えるのだろうか。

罪を償わずに、自分が奪った命や傷付けた命を忘れていくのだろうか。そう思うと、堪ったもんじやないと叫びたくなるのは…私だけ？

「千早ちゃんの間違ってないけどね、私たちにはどうしようもないのよ」

…非情だと、思った。

「でもね」と加賀見先生は眉を下げながら笑った。バインダーからは新たな真っ白い紙が取り外される。それを机に滑らせて、私にボールペンを差し出してくれた。

そこには『署名』の二文字が大きく印刷されていた。ずらりと並

ぶ、見知った名前の数々。一番下には小さく、九月四日無差別殺傷事件被害者の会と記されていて。こういう方法もあったのか、と思いきや出された。

そこにはもう既に真山先輩を始めとする学生マンションのみんなの名前、大学の先生の名前、知り合いの名前、知らない人の名前。たくさん書かれてあった。思わず名前に指を滑らせると、加賀見先生が教えてくれる。

「それね、真山さんと千早ちゃんの友達が集めてくれたのよ。それが確か、ちょうど三十枚目だよ」

二十人ほど書ける署名の紙を、三十枚も集めたのか。六百人と聞いたところだろうか。この数は大学内だけではないのだろう。大学の人の兄弟や家族の名前もその中には簡単に見てとれた。

紙の隅には綺麗な字で「悲しんでいる人、傷付いている人、みんなのために」と書いてある。きつと、みんなで配れるようにそう書いたのだろう。これは、確か玲奈の字。

加賀見先生が出してくれたものの隅にも、きつちりと書かれていた。それは由利の字や真山先輩の字、みんなの字で書かれている。それに寄せ書きのように、裏側には『頑張れ！』や『負けるな』『応援します』と残されていた。

私が寝ている間、こんなことをしてくれていたのだ。毎日、こんなにたくさんさんの署名を集めてくれていた。真山先輩だって、私だって、ある意味では心に傷を負った被害者だ。私だけじゃない、真山先輩も同じか、それ以上だというのに。

「千早ちゃん、」

「……あ、すみません。すぐに書きますね」

ボールペンを署名用紙に走らせると、加賀見先生はたくさんの中

から一枚を引つ張り出した。そこには、小さな丸文字と決してきれいとほ言えない字で『遠藤花菜』『遠藤翔真』と書かれていた。裏側を向けてみれば、花菜ちゃんの丸文字と翔真くんの字があつて。

娘を守つてくれた方が早く目覚めますよう。

娘を守つてくれてありがとうと、会つて伝えたい。

本当に、何度ありがとうと伝えても足りないのではないかと思う。たった一回なんてあり得ない。百回言つても千回言つても、それだけでは全く足りないだろう。言い回しなんて出来るはずもない。ありきたりな言葉で、何度でも伝えよう。

「良い家族と友達と彼氏を持ったのね、幸せ者」

そう言つて、加賀見先生は頭を撫でてくれた。頷いて、目尻に浮かんだ涙を拭つた。

「私が、負けてちゃダメなんですよね。私が……飯塚先輩のために一番頑張つてあげなくちゃ！」

元氣、出た。

紙を加賀見先生に返すと、彼女は安心したようにため息を漏らした。私が悲しんで、犯人を憎んで生きていくとも思つていたのであるか。以前までの私なら、否定は出来なかつた。でも、いまは違うから。私には仲間がいて、支えなければならぬ人がいるのだ。意地でも強くならなきゃ。

その一心で、前を向こうと思える。支えてくれる人たちに大声で『ありがとう』と叫ぶのは、私がしっかり前を向いてからしかできないことなのだ。だからこそ、立ち上がって前を向かなければならない。

「飯塚先輩にどやされる前にしっかりしなきや」

もう、心配かけない。

ねえ、飯塚先輩。

真山先輩はもう頑張っています。私は遅くなっただけど、いまから頑張ります。学生マンションのみんなや、大学の人たち、大学の先生も、みんなどこかで力になるうとしてくれています。凄いですよ、飯塚先輩のためにみんな。

だから、飯塚先輩も。

頑張らなきゃいけませんよね。早く起きて、元気になってみせないといけませんよね。笑って、いつもみたいに怒ってみせないと私はそれまでに元気に笑って、ちゃんと起きた時には先輩を支えてみせますから。

だから、だから…。

起きてくれるまで、ずっと側で待っていますから。早く目を覚ましてくださいね。

「何か悩んでるみたいだな」

飯塚先輩たちと出会って、一年が過ぎた。二回目の、四月がやってきている。

四月十二日。何の変化もない、桜の咲き誇る日のこと。

相変わらず、私たちはラウンジで座って自由気ままに過ごしていた。各々に好きなことをしながら、ソファーに身を沈めている。女組は三階、男組は二階といった自然な割り振りになっていた。

私は写真を整理していて、隣で由利は足を組んで雑誌を読んでいる。向かいで玲奈はカメラをいじっているし、斜め前では雅先輩が難しそうな本を読んでいた。誰も何も話すことはないが、それなりに落ち着ける空間だ。

「……アイス食べたい。コンビニ行こーっと」

「あ、じゃあ私も」

え、何、みんなで行くの。慌てて立ち上がると、にっこりと笑った由利が手で制止を促してきた。この笑顔は妙に怖い。由利はチェストにおいてあった財布を手に取り、私の分も買ってきてあげる、と言う。それに頷くと、雅先輩に笑いかけた。

「雅先輩も、一緒に行きませんか？」

「ああ、いいぞ」

「えっ、じゃあ私も行く！」

ぱつと立ち上がれば、由利に睨まれた。

……絶対に何か企んでる顔だ。

睨み返したものの、対して目力は強くないから負けてしまう。玲奈と雅先輩は薄手のカーディガンを羽織っていて、もう出かける気でいるらしい。

仕方ないから、待つ。

そう言っソファに身を沈めると、由利は納得したように大きく頷いた。それから財布を片手に、陽気に階段を下りていく。最中には鼻歌まで歌うくらいのご機嫌さである。くそ、腹立つな。小さく悪態を吐きながら、写真をアルバムの中に納めた。

そうしてしまえば、特にすることも無い。話し相手もいなければ、何も持つて来ていないのだ。

部屋に戻ろうかと腰を上げたところで、二階から上ってきたらしい真山先輩に呼び止められてしまった。どうやら、彼も暇らしい。飯塚先輩は、と言いかけて口をつぐんだ。いま、特に彼に用事があるわけではない。真山先輩の後を追うように二階に下りると、ラウンジにいたのは彼一人だった。普段ならば健太や江藤くんがいるはずなのだが。

「上村と江藤なら、さっき桐島に連れて行かれたぞ」

やはり由利の仕業らしい。これは真山先輩と二人にしたかったのだろうか。そう考えながら、真山先輩と向かい合うソファに腰を下ろした。それからアルバムを捲り、自分のお気に入りには目印のためにインデックスを貼っていく。

真山先輩は、と声に出すと雑誌を読んでいたらしい彼は目を丸くして顔を上げた。どうやら陸上の雑誌らしい。ユニフォームを着た人のインタビュー記事が目についた。

「由利に行こうって言われなかったんですか」
「いや、俺は部屋にいたからな。声だけしか聞いてないんだ。今日はまだ誰とも会ってない」

そうか。由利なら真山先輩でなく、飯塚先輩と私を引き合わせたはずなのだ。それなのに真山先輩とこうなっているということは、彼がいることに気付いていなかったのだろう。それはそれでよかったような気がした。

真山先輩は再び視線を雑誌に落とし、小さくため息を漏らした。それからぼつりぼつりと話し出す。

「……リュウが、何か悩んでるみたいだな。聞いたんだが答ええない。その話がしたくて待ってるんだ」

それは、帰って来ていないという意味なのだろう。しばらくは部屋で待っていたのだろうが、待ちきれなかったといったところか。真山先輩ならありえる、と頷きながらアルバムを数枚捲った。

確かに、飯塚先輩がいつもよりも帰りが遅いというのは知っていた。いつもなら、きつともう既に部屋にいる時間帯なのだ。講義が終わるなり即刻部屋に戻る飯塚先輩のことだから、心配になるのも無理はない。とはいえ、大学生のしかも男を心配するのはさすがに……と言葉を濁す。

まあ、でも。

五時にはいつも部屋にいる飯塚先輩が、七時になっても帰っていないというのはさすがに心配にはなるかもしれない。食料の調達だったとしても明らかに遅すぎる。まあ、両手にスーパーの袋を持った飯塚先輩など想像出来ないのだが。

さすがにケータイを鳴らすべきなのでは、と言いかけて口をつぐんだ。彼は根っからの無精なのである。ケータイはメールよりも電話の方がいいらしいが、それもあまり長くは続かない。メールは送っ

ても帰って来ないことがしょっちゅうだ。

「そついえば真山先輩、飯塚先輩とは幼なじみなんでしたよね」

それに反応して、彼の視線は再び私に向いた。それから小さく頷いて、家族で仲が良いんだ、と消え入りそうな声で呟く。

…ああ、そついえば香子さんも。飯塚先輩と同じように親しくセージって呼んでたっけなあ。

思い出しながら、一人で勝手に納得した。飯塚先輩と仲が良いだけなら、あんなにも香子さんと仲が良いはずもない。よく考えてみれば、ごく当たり前の話だった。

「昔からひねくれててな。全く仲良くなんてしてくれなかったよ、アイツは」

「ああ、それは安易に想像がつかます」

アイツとは呼ぶものの、その中に嫌悪などは含まれていない。むしろ、どこことなく気軽さがあつた。

小さいころの飯塚先輩など想像できるはずがなかった。だが、ひねくれているというのは安易にわかる。今でも大概ひねくれているよ、と心の隅でそう思ったが口には出さないのでおいた。

そう。今でも大概ひねくれていて、それでいて大人びた風体なのにたまに子供みたいな時がある。ごくごくたまにだが、子供のように拗ねたりだとか悪戯を計ったりはしているのだ。そついったところを見る度に、この人も変わらず子供なのだと何度も思わせられた。時々、真山先輩の方が大人に見える時だつて…。

と、そこまで考えてやっと気付いた。二人はそつやって今まで均衡を保ってきたのだと。それでなければ、これほど上手くはやっていけないだろう。しかも、こんなにも長期間に渡ってまで。二人の均衡はお互いの性格や機嫌で保たれていたのだ。

飯塚先輩には、真山先輩みたいなタイプがいいのだろうか。相性はこれ以上ないほどいいのだろうか。果たしてそれが飯塚先輩の好みなタイプのかどうか。さすがに聞く気にはなれないが、頭の隅でモヤモヤと霧がかかったものが生まれてしまった。

雑誌を小脇に抱え、真山先輩は立ち上がった。もしかして部屋に帰るのかな、と思ったところで真山先輩は身を翻す。紺色のベストから覗いている真っ白なワイシャツがはためいた。コツリと革靴が音を立てて、ラウンジに響く。

「真山先輩？」

「雑誌、置いてくるだけだ。あとはアルバムでも探してくる」

「アルバムですか」

「ああ。遠藤、たぶんリュウの子供のころは知らないだろうからな。確か写真があつたはずなんだ」

見たいと声を張ると、真山先輩はやはり笑った。部屋の中へ消えて行くのを見送ってから、静かにアルバムを閉じた。

飯塚先輩や真山先輩が子供だったころ。とはいえ、二つしか変わらないのだから大した差はないのだろうか。それでも出会ったのは大学が上がってからなので、子供のころと言われても想像はつかないのだ。

そう言ってみれば、飯塚先輩や真山先輩も私の子供のころなんて想像も付かないのだろう。性格だって今よりも難しかったので、余計に想像するのは困難なはずだ。私に比べればマシか、なんて考えて、思わず自嘲してしまった。

それからもう、静かに真山先輩を待っていた。ため息を漏らせば、空中に溶けて誰にも知られないまま消えてしまった。飯塚先輩は何してるんだろう、と思ったがその考えを振り払ってアルバムを抱える。

意識はもう、真山先輩の部屋の扉に向けられていた。

「セージに話すことなんてねえよ」

真山先輩が出て来るよりも早く、キュッキュツとリズムの良い音が階段から響いてきた。これが一つしかないということは、当てはまるのはたった一人しかいない。思わず立ち上がれば、やっと帰って来た本人が驚いたように目を見開いた。

にっこりと笑えば、あからさまに嫌そうな顔に切り替えられた。それはいつものことなので、特に何とも思わなくなっている。とにかく、真山先輩が帰って来るまでは引き留めておく方がいいだろう。何しろ、彼は飯塚先輩を待っていたのだから。

「座って、話でもしません？ 暇なんですよね」

「あ？ 今からメシ食うんだっつ。暇なら帰って課題やれ、課題」

どうせやってないんだろうが、と言われて言い返せないのが私だ。図星かと言いたげな表情をしてから、飯塚先輩は眉間に深いしわを刻んで真山先輩の部屋の扉を見た。やはり、こちらも意識して避けているのだろうか。

「真山先輩、いまアルバム取りに行ってくれますよ」

思わず口をはさめば、飯塚先輩は私を一瞥した。

「わかるのか、とでも聞きたいですか？ わかりますよ、飯塚先輩って意外とわかりやすいから」

にっこりと笑ってみせれば、ますます先輩は顔を歪めた。えらく嫌そうな顔をしますねなんて言ってやれば、頭を叩かれる。手加減など存在しないともいうような力に、思わず涙目になってしまった

のだが。

先輩は特に気にした様子もなく、ただひたすら睨むように私を見ている。まるで射るかのような視線が、突き刺さるようで痛い。とはいえ、いつもと変わらないので特にダメージはない。言い換えるならば『いつも通り』。

そうして視線をそっち退けにして、私は先輩の服の裾を引いてソファーに座らせる。こうすれば、先輩は渋々でも一緒にいてくれることを、私は知っている。だからこそこうして、先輩の腰を落ち着かせようと試みているわけなのだ。

今日の先輩は、なかなか座ろうとはしなかった。粘った末に、健太が言っていた『男はみんなコレに弱い！』という技を試してみる。まあ、平たく言えば普通の上目使いなのだ。それでも先輩は眉間に深くシワを刻んだまま、私を見下ろすだけ。

失敗、といえば失敗なのだろう。それでも、限りなく成功に近い失敗だったことに変わりはない。

しっかりと掴んだ裾を離さなかったのが吉と出たのだ。

「遠藤、一冊で悪いが……」

ガチャリと開いた扉から、真山先輩が顔を出す。そして何故か一時停止をした。飯塚先輩も同じようにピタリと固まってから、我に返ったかのように前に進む。自分の部屋に行くつもりなのだろう。

慌てて裾を掴む力を強めると、飯塚先輩にこれ以上ないくらいの目力で睨み付けられた。これはさすがに、怖くないわけがない。今まで向けられていた視線が、優しくなったのかと思うほど鋭い。あれでも多少の手加減はあったのだと、思い知らされた。

真山先輩が慌てて飛び出してきて、飯塚先輩の前に立ち憚った。その目はどこか悲しげに揺れていて、この場においていいのか迷ってしまう。聞きたい。それでも、聞いてはいけない話だ。だから。

あえて、身を翻した。

「私、部屋に戻りますね。みんなが帰ってくるはずですから、部屋で話した方がいいですよ」

それだけ告げて、階段の方へと足を運ぼうとした。しかし、それは出来なくなる。いつの間にかやら、がっちり腕を掴まれていた。目を丸くした飯塚先輩と、真剣な目をした真山先輩。腕を掴んでいるのは、真山先輩だった。

「遠藤には俺たちが感情的にならないように、ここに居て欲しいんだ。時間もそうかからないから、ここで構わん」

「……わかりました。真山先輩がそう言うのなら」

こくりと頷くと、何とも安心したような顔で真山先輩は微笑んだ。

「リュウ」

すぐに飯塚先輩に向き直って、真山先輩はラウンジのソファに座るように促した。右には飯塚先輩、左には真山先輩。二人の間にあるソファに座って、邪魔にならないように縮こまる。

真山先輩はまるで私がいけないかのように話を進める。飯塚先輩は不貞腐れたように顔を背け、頬杖をついていて。話を聞く気はあるのだろうか態度が伴っていない。そんな態度に慣れているらしい真山先輩は、何も言わずに本題を話し続ける。

「……何か悩んでるのか？ リュウはいつも抱え込んで、すぐに自分の感情を押し殺すだろ。それがお前の悪い癖なんだ」

昔から知っているからこそその口振り。飯塚先輩も、不貞腐れては

いるが否定はしないらしい。が、機嫌がすこぶる悪いのも間違いないらしい。

「俺には話せないことか？」

とにかく話し合いという話し合いにはならなさそうだ。真山先輩の言うことを一方的に聞きながら、ぼんやりとそんなことを考えていた。飯塚先輩は顔を背けたままで、真山先輩の顔を直視することはない。

まあ、怒鳴り合いや掴み合いにならないだけいいのだろうが。やはりそれでも明らかに一方的な問いかけに、何とも言えない気持ちになった。少しは見えていたことだから先輩が不憫だとまでは言わないが、こっちが苦々しく思ってしまうのだ。

その話し合いの流れが変わったのは、真山先輩の一言。

「昔っからそうだよな、リュウは。そんなに俺が頼りないか。それとも、リュウが孤立したいだけなのか」

その目は、鋭い。それでもその中に、どこか悲哀の色が混じっているのを感じ取ってしまった。真山先輩は、飯塚先輩からちゃんと本音を聞き出したい。その思いが、ひしひしと伝わってきてしまったのだ。

思わず、私が口を挟みそうになった瞬間。飯塚先輩が、初めて口を開いた。その口からは、いつもよりも数倍低い声が出される。

「セージに話すことなんてねえよ。俺はお前を頼りにしたことなんて、」

その続きが、読めてしまった。真山先輩が目を見開いて息を呑んだ。喉仏が上下するのを確認する間もなく、思わず手を出してしま

つ
た。

「それ以上は、言わないでください」

パチンと小気味良い音が鳴って、飯塚先輩の頭がぐらりと揺れた。そんな強い力で叩いたつもりはないが、飯塚先輩にはずいぶんと不意打ちだったに違いない。

今まで私が、誰かに怒ったところを見せたことはなかったから。だからこそ、仲裁と言っても手を上げることはないのだとタカを括っていたはずだ。そんな気の緩みから、軽い力でも彼の頭は予想以上に大きく振れたのだろう。

頭に血が上っているからこそ手を上げたはずなのに、何故か頭の片隅では随分と冷静な自分がいた。きっと、そのことに一番驚いているのは自分自身だと思う。手を上げたことにも、怒りを露にしてみましたことにも、何故か冷静な自分がいることも。私自身が一番驚いているはずだ。

「それ以上は、言わないでください。普通な顔をしてたって……、泣かなくても、怒らなくても。それは露にしなだけで、内心ではしっかり感じているんです。飯塚先輩が自分の内側に抱えてるものがあるように、真山先輩だってたくさん抱えてるはずだから。自分だけが抱えてるんだとか、そんなこと思わないでください」

悲しかった。

真山先輩が否定されてしまうことが。今まで真山先輩が頑張って、根気よく付き合ってきたのは私にだってよくわかった。真山先輩がこの関係を持つとうとしてきていた。これがなくなってしまうえば、きっと二人は今のように戻れない。

それは、飯塚先輩が今の言葉を最後まで言ってしまうと本当に壊

れてしまっただろうと思った。造り上げるのに、どれだけの時間と体力を費やしていたって。壊してしまうのは驚くほど簡単だ。本当に一瞬で、すべてがなくなってしまう。

どうして、この人はこんなにも頑なになっているのだろうか。どうして、人の優しさを素直に受け止められないのだろうか。それも悲しくて、何故か部外者である私が泣きたくなった。手が、震える。

「遠藤、もういい」

真山先輩が抑揚のない声で私を咎めた。それでも、私の口は止まらない。

「よくない！」

真山先輩は、飯塚先輩が好きだから、心配だからこそ、こうやって言ってるんでしょう！

それをつ……こんなにも簡単に捨ててしまっているんですか！こんなにも簡単に、切り捨てられていいんですか！」

私は、いやだ。

私だったら、自分の感情をこつも無下に切り捨てられて平気でいられるわけがない。辛くて、悲しくて、きつとやりきれない気持ちで一杯になるだろう。それと同時に、喪失感に襲われて。簡単に人に触れることを躊躇うかもしれない。

真山先輩に、そういった気の遣い方は向いていない。間違いない、ぶつかる優しさが真山先輩なりの気の遣い方なのだ。

だからこそ、真山先輩に「そうか」なんて簡単に折れて欲しくなんてなかった。

「想われてるって優越感に浸って、努力を知らずに切り捨てるなんて……！」

真山先輩の努力を、たった一言で片付けて……！ 私は！ 真山先輩が『そうか』なんて折れてしまふのなんて見たくないんです！」

言い切ってから、自分が泣いていることに気付いた。

ああ、そうか。なんて自分で冷静に考えた。今まで憤っていたはずなのに、言い切ってしまったらこうも冷静になってしまふなんて。自分の中にこんな能力があることに驚かせられた。この人たちといると、こんなにも知らない自分と出会える。
いやでも、出会わせられる。

「飯塚先輩にも、そんな残酷な人にはなつて欲しくないんです」

それでも涙だけは、止まることを知らなかった。

… 飯塚先輩が好きだ。

それでもつて、飯塚先輩と真山先輩と一緒にいるところを見るのも好き。どうしてだからかはわからないけれど、真山先輩と飯塚先輩と一緒にいると私まで嬉しくなる。

きつとそこに、変わらない絆のようなものが見えていたからだろう。

飯塚先輩には、逃げて欲しくなかった。彼はあの言葉を本心で紡ごうとしたわけではないのは、私にだってわかっていた。それでも、あの言葉を言ってしまうえば距離が出来るのは目に見えていたから。逃げずに、真山先輩と向き合つて欲しかった。

きつと、真山先輩という存在は飯塚先輩になくしてはならないものなのだ。それがなくなつてしまえば、本当に彼は人として大事なものが抜け落ちてしまうような気がした。どれだけ憎まれ口を叩きながらもそれほどなくてはならない存在として確率している。

ボロボロと零れ落ちる涙は未だに止まらない。両手で擦りながら、

何も言わない二人から少し離れる。

「すみません、口挟んじゃって。……帰ります」

今度は、どちらとも引き止めることはなかった。今はそれが有難い。

身を翻して、足早に階段を駆け上った。そして自分の部屋に飛び込む。ガツンと頭を扉で打ったが、そんなことは最早どうでもよかった。

ずるずると玄関でへたりこんでしまう。零れ落ちる涙は止まることなど知らない。重力にしたがって、どんだん服に染みを作っていく。雨が降っているかのように、ひっきりなしに染みはできていく。一つ、二つと増えていってしまう。

意識してしまった、遂に。

今までどことなくかわしてきた恋心を、遂に認めて意識してしまった。それと同時に会いづらくなってしまったのは、きつと気のせいなどではないはずだ。

特にこの恋が叶わなくなっても構わない。だから、彼らだけは仲良くあって欲しい。要らないとか、嘘でもそんな風には言って欲しくない。

「ふ……っ……っ、」

お願いだから、いつものように戻ってくれますように。

「俺たちの大事な娘だから」

しばらくして、重くなった瞼を無理やり持ち上げた。少しだけヒリヒリと痛んで、鏡で確認すれば目は真っ赤に充血してしまっている。濡れタオルでしつかりと抑えつげながら、次はベッドに飛び込んだ。重苦しいため息を一つだけ吐き出す。

今まで、由利や健太にどれだけ核心を突かれようとも否定してきたこと。それを、アツサリと甘受してしまった。嫌なわけではないが、人を好きになるのは怖い。裏切られることも、自分を見失うことも怖いのだ。だから、恋なんてしたくなかったのに。

感情のブレーキは、あつという間に壊されていたのだ。きっと、初めて会ったあの瞬間から。だからこそ、先輩について回っていたのだろう。自分ではほぼ無自覚だったものの、本当は全て最初から狂わされていたのか。

「……………喉渴いた」

冷蔵庫にはこれといって何も入っていない。入っているのは二リットルのお茶のペットボトルなどの飲料水と軽い食べものだけ。生活感など皆無に等しいと言える。

しばらくぼんやりとしていたら、ケータイが騒ぎだす。個別の着信設定にしているせいで、誰からのものかは一瞬でわかる。今は出たくないと思っていたものの、相手が相手なので出ないわけにはいかないらしい。

鳴り止まないケータイを取って通話ボタンを押すと、向こう側はざわざわと賑やかな声がしていた。きつと、私が出たことに気付いていないのだろう。誰かと受け答えしているのも、微かにだが聞こえた。

「……翔真くん？」

そう呼べば、すぐに返事が返ってきた。

『ちい、今からそつち行くから前で待っててくれる？ 中入っていないなら、入れてもらうけど』

会いたくない、とは口がさけても言えなかった。とはいえ、今は部屋から出られるような顔をしていない。泣き腫らした目を他の誰かに見られるのは、翔真くんがマンションに入るよりもずっと嫌だ。少し考え込んでいる間、翔真くんは黙って返事を待っていてくれた。そうして出した私の答えに、自分がずいぶんと間の抜けた声を返すことになるとも知らずに。

「……上がってきて。三階の二〇三号室。鍵、開けておくから」
『お……っ、は？』

おう、と返事しかけたものの、自分の予想していた返しとは違っていただろう。電話の向こう側で、戸惑っているのがよくわかる。わたわたとしているようで、時々『どうしたよ、遠藤ー』という呼び掛けが聞こえてきた。

しばらくして、やっと返ってきた返答は『今すぐ行く。着いたら話聞くからな』というものだった。黙っていたら電話は切れていた。翔真くんが部屋に入ることを躊躇うのは、きっと私と同じ考えがあるからだろう。彼は、大学生の娘を持つ父親にしては若すぎる。というか年齢よりも若々しいから余計なのだ。隣に並んで歩いて友人から『彼氏』かと言われた回数も数えきれない。

さすがにこんな年上の彼氏はおめんこうむる、という切り返しでいつも話は終わるのだが。寮のみんなに翔真くんが父親だと話せば、絶対に首を傾げるだろう。若すぎる父親も考えものだ。

インターフォンが鳴った。外が騒がしいことを思えば、きつと鳴らしたのは由利が健太なのだろう。向こう側で騒いでいる声がただ漏れた。居留守しよう、と心に決めた矢先、バタバタとうるさいくらの足音が廊下に響いた。

翔真くんだ。間違いなく、確実に。

「千早、開けるぞ」

やはり。ガチャリと押し開けられた扉から顔を出したのは翔真くんだった。珍しくあからさまに眉間にしわを寄せながら、難しい顔をしていた。どうした、と言うこともなくローテーブルの隣に座る壁にもたれかかって、小さくため息を吐き出して前髪を掻き上げた。それから、翔真くんと目が合った。スーツがしわくちやになるかと思つて、近くのハンガーに手を伸ばす。

私の手がハンガーを取るよりも早く、翔真くんが取り上げてしまった。あ、と思つて顔を上げれば、困った顔のような翔真くんがいた。きつと聞きたいけど我慢してくれているのだろう。でも、私も今は話す気にはなれない。

へらつと笑つてみせると翔真くんも同じように笑つてくれた。それからコンビニの袋を渡される。中身は大好きなスイーツとアイス。甘いもの食べたら太るんだよ、とは思いつつもこれは嬉しい。

「ありがとう」

「ん。飲み帰りに寄ろうと思えば、ちいがおかしいから。糖分不足かと思つてさ」

おかしい。まあ、いつもと反応は全く違つたから『おかしい』という表現も間違つていない。翔真くんに話しても解決するわけじゃない。それでも、翔真くんは私よりも経験が多い。

言おうか。言つべきなのだろうか。

ネクタイを緩めた翔真くんに頭を撫でられた。スーツのかかったハンガーを引つ掛けて、冷蔵庫からお茶のペットボトルを持って来る。入れ替わりに立ち上がって、コップを二つ運んだ。

「まあ、大学生なら悩むことくらいたくさんあるよな。俺もそうだった」

翔真くんは眉を下げながら笑った。思い出すような遠い目で、口ーテーブルを見ている。そっとお茶を出して、それとなく話に乗っけることにした。

「そういう時、翔真くんならどうしてた？」

自分が思ったよりも、幾分か小さな声になってしまったことに驚いた。消え入りそうな自分の声。翔真くんは、そのことに触れなかった。

「自分一人で解決しようと思えば思うほど、泥沼に嵌まるもんなんだよ。俺は、幼なじみだったかな」

助けてくれたの、と付け足した。それからお茶を飲み下す。翔真くんの大学生のころの話なんて初めて聞いたし、幼なじみがいたことも初めて聞いた。

泥沼、と言われれば、確かにここから先は一人で泥沼に嵌まるうとしているところなのだろう。思わずため息を漏らしてしまうと、翔真くんがケラケラと笑った。

よく考えてみると、新鮮かも知れない。翔真くんのような温和な人が泥沼に嵌まるなんて。いつも笑って、人当たりのいい人だから泥沼のような状況に陥るとは考えられなかった。そんな翔真くんが見てみたいと思ったのは、胸に秘めておこう。

「そっか。ちいもそんな年になつたんだよなあ」

かく言う翔真くんはまだ若い方だと思う。まあ、大学生の娘を持つ親にしては、という意味だが。

軽快なインターフォンが鳴り響いた。酷い顔をしたままの私が出ないと思ったのか、我が家のように翔真くんが玄関に歩いて行く。ぼんやりと壁を見つめたまま、どうしようかと考えた。泥沼に嵌まる趣味はない。

ガチャリと扉を開いた音がして……。

「……えっと、どちら様？」

翔真くんの、困つたような声が聞こえた。まさか、先輩が来てるとかはないよね。さっきあんなことになつたばかりだし、と自己完結する。

「千早！」

翔真くんと呼ばれた。

仕方なく部屋から顔を出すと、そこにはカチンと固まっている人。今日ばかりはさすがに来ないと思っていた。それなのに、どうして同じようにカチンと固まった私を見て、翔真くんが目を丸くしたのがわかった。

それから何かを感じ取つたのか、先輩の手を引いて中に引きずり込む。もはや先輩はされるがままになっていた。翔真くんを引きずられる先輩と、押される私。

「よくわからんけど、俺もいるからちゃんと話しな？」

翔真くんは、全てをわかっているかのように笑った。私たちは向かい合って、黙ったまま座っている。その間に座るようにした翔真くんの笑顔が、いつもよりも嬉しそうな気がした。

「……皿、借りるぞ」

先に沈黙を破ったのは飯塚先輩の方だった。いつものように持っていた紙袋からタッパーを取り出す。作りたてなのか、蓋を開ければ湯気が出ていた。お皿を取りに行った先輩と私を交互に見て、翔真くんは眉を下げる。

先輩の持ってきたお皿の数は三枚。箸も同じように割り箸をあわせて三膳。きつと、翔真くんの分も考慮してくれているのだろう。私が立ち上がってコップを出すと、翔真くんがお茶を淹れて出してくれた。

「ありがとうございます。よかったら、食ってください」

多めに作ったんで、という言葉は嘘ではない。明らかにいつもよりも多い。飯塚先輩がこちらで食べることも珍しいし、こんなに大量に作るのも珍しい。

いただきます、とどちらからともなく言って料理に手をつけた。今日のメニューはアスパラベーコンとサーモンのマリネ、ポテトグラタン。それを見た翔真くんが目を輝かせた。彼も私と同じで、子供みたいなメニューが好きだ。

「おー、美味！ え、君が作ったの？ 上手だな」

君って。思わずつつこみたくなったが、きつとお互いに誰か知らないままこういう状況になっているのだろう。呆れた。ため息を吐いてからグラタンをつついていた箸を置いた。

「翔真くん、こちらは大学の先輩の飯塚龍之介サンです」

そう言えば、先輩が小さく頭を下げた。翔真くんは、ちいの先輩だったのか、とにこにこ笑う。翔真くんは自分で言ってるね、とあしらってまたグラタンをつついた。

「ちい、困る」

どこまで話しているのか、ということだろうか。箸を止めると、真面目な顔をした翔真くんの視線とぶつかった。確かに、いつもは自分から説明する。親だということを隠していたから。

それでも、先輩は違う。以前に全てを話してしまっているから。翔真くんは、私のお父さんでいいんだよ。

「飯塚先輩、こっちは父の、翔真くんです」

そう言つと、先輩は見開いた目を丸くした。

「……は？ 父って」

「事情は以前説明した通り。父にしては若いですけどもう三十路過ぎてます」

グラタンを頬張る。飯塚先輩はピタリと固まっていて、翔真くんはぐすぐすと泣き真似をしているばかりだ。とは言っても翔真くんは今年で三十四という若さで、私とは十四しか変わらない。そんな父親だから、援交だとか言われるのだろうが。

飯塚先輩は何も言わずに、フリーズ状態になっている。その最中でさえ、私は箸を止めない。真つ赤に腫れた目を見られないためにも、あまり先輩の方を見ることもない。翔真くんの名前までは言っ

ていないが、先輩には以前に事情は話している。

「千早の父の遠藤翔真です。いつも娘がお世話になっているようで」

娘だと言るのが嬉しいのか、翔真くんは照れたように笑っている。ぼんやりと翔真くんの顔を見ながらも、やはり童顔だと思った。もう三十四になる男には見えない。それ故に、周りからは彼氏かと聞かれるのだろうか。

今まではなかなか父親だと言わせてあげられなかったから、これからはせめて機会を増やしてあげることによろうか。ここまで嬉しそうにされると、何故か悪いことをしていたような気分陥った。

「……いえ、そうでもないですよ」

飯塚先輩は解凍されるなりすぐにマリネをつまんだ。しばらくは沈黙に包まれるかと思いきや、そうでもなかったらしい。とは言っても、翔真くんの口が、なのだが。

「飯塚くんだったっけ？」

「はい」

「あんまり、千早を泣かせないでね。花菜も俺も心配するから。ほら、あんまり泣かない子だから余計にさ」

にこにこ笑って軽口なもの、その目は全く笑っていなかった。

「千早は、俺たちの大事な娘だから」

わしゃわしゃと頭を撫でられて、元々整えてもいなかった髪はより無造作になってしまった。胸元より少し短めの赤茶色の髪が、あちこつちに向かって跳ねている。

飯塚先輩はまるで苦虫でも噛み潰したような顔をして、翔真くん
に頭を下げた。それから、何かを言おうとして口を開く。だが、そ
の口からはなかなか言葉が紡がれることはなかった。

何より、あの全ての責任が飯塚先輩にあるわけではないのだ。翔
真くんがそう思うような人でないことはわかっているが、どうして
もそれだけは弁解しておきたかった。

翔真くん、と言いかけた口は本人によって塞がれてしまった。口
角を上げて意地悪く笑った翔真くんを見て、すぐにわかってしまう
やはり彼は全てわかっていて、わざとああいう風に言ったのだとい
うことを。単に、私たちを困らせたかっただけなのかもしれない。
夕子の悪い。と悪態を吐こうにも、翔真くんの手がそれを許して
はくれなかった。

「話もあるだろうし、俺はもう帰るよ。千早、またね。飯塚くん、
ご飯ありがとう。美味しかったよ」

いえ、と飯塚先輩はそれだけ言ってまた口ごもってしまった。私
が立ち上がると、翔真くんは無理やり座るように促されてしまう。
見送りは要らないといたいのか、にこにこ笑っていた。

スーツを羽織って翔真くんが出て行くのを見送って、二人になっ
たことを早くも後悔する。沈黙がずいぶんと思うのは、きつ
とさっきのせいだろう。

お互いに箸が止まっていたのに気付いたのか、食うか、と先輩が
呟いた。私はそれにこくりと頷き、色んな料理をちまちまと皿に取
る。どれも私の好きな料理ばかりで、狙ったのかと思ってしまうほ
どである。

「……食ったら、ちょっと話すか」

わかっていたことなのに、気分が沈むのがわかった。眉間にシワ

を寄せる先輩。私だってきつと同じような顔をしているはずだ。
沈黙は、食べ終わるまで続いていた。

「俺たちの大事な娘だから」（後書き）

今回、ペース配分間違えてしまったので一ページの文章量が多いです。申し訳ありません。

ちなみに小話を活動報告にてアップしました。

「お前は、しなくていい」

私は、飯塚先輩と出会ってからよく泣くようになった。それは百も承知している。

「話っつーのは……」

ぼつりと先輩が口を開く。心の準備をする間もなく切り出されたせいで、心音がやけに乱れているのが自分でもわかってしまった。怖いと、恥ずかしいとの気持ちが悪く交錯していて、自分でもよくわからなくなってしまうている。

「ただ、その……悪かった」

バツが悪そうに吐き出された言葉に、驚いた。視線を逸らしてはいるものの、やはり眉間にはしわが寄っているらしい。ということ、真山先輩に謝ることを強要して来たわけではないということなのか。そう思うと、少し嬉しかった。

首を大きく横に振ると、髪がぐしゃぐしゃに絡まってしまった。今、気を弛めてしまえば、きつとまた泣いてしまうような気がして必死で気を引き締めて、翔真くんの持つて来てくれたコンビニ袋に手を伸ばした。

「先輩、食べましょう。翔真くんの奢りです」

どん、と机に置いた。その中にはゼリーやら、シュークリームやらが山ほど入っている。これは私一人では到底食べきれないような量であるのは目に見えているし、このまま気まずい空気が流れて別れるのも嫌だった。

飯塚先輩は立ち上がった、コーヒーマーカーでコーヒを作ってくれて。その間に私は袋の中のお菓子を種類別に仕分けをしておいた。

見た目から『甘い物は苦手そう』とイメージされるらしい飯塚先輩。だが、それとは真逆で意外と甘い物は好きなのだと言う。お酒の肴もチョコレートであったりするのでそうだ。まあ、甘い物好きだと知ったのは私もつい最近のことなのだが。

シュークリームやエクレアやチョコクレープ、みかんゼリー。全て私の好きなものばかりだが、多少は飯塚先輩ともかぶっているものがあるだろう。それにしてもチョコレート類が多かった。最近にきびが目立つから控えていたのに、これでは意味がない。

「……どうした。手え止まってんぞ」

不思議そうに言った飯塚先輩は、きつと女の子の心情などわかるはずもない。いえ、何も。ため息混じりけにそう溢してから、チョコレート類をざかざかと端に寄せた。シュークリームの袋を摘み上げて、封を切る。

「好きなもの、好きなだけ食べてくださいね」

「ああ」

ひよい、と飯塚先輩が持ち上げたのはチョコクレープ。やはり、甘いものには目がないのだろうか。というか、にきびなどが出来ないことが羨ましい。私なんてすぐに落ちちゃうのに、と心の中で毒吐いて。それから、シュークリームにかぶりつく。

その最中は、無言。それでも、さつきよりは幾分も穏やかな沈黙だった。

「……あの人、若いな」

それが翔真くんのことだとを言っているのは、すぐにわかった。こくりと頷いて、口内に残るシュークリームを咀嚼する。その間、飯塚先輩の手は止まっていた。

「三十四ですけどね、もう。母親の花菜ちゃんは三十三ですし」
「……いつから養子になったらそんな歳になるんだよ」

いつから？

しばらく考えたのは、記憶を遡るため。私は一体いつから養子だったのだろうか。花菜ちゃんとはずいぶん昔からずっと一緒にいたはず。それなのに思い出せるのは、花菜ちゃんが結婚する直前の二十二の頃から。私が、十歳の記憶からだ。

生まれた頃から、小学校に上がる前までの記憶はない。それも全く、と言えるほど思い出せないのだ。小学校に上がる少し前には、もう既に祖父母の家に居座っていたような記憶がある。だから、必然的に十八の、制服を着た花菜ちゃんは知っているということになる。

翔真くんとは大学で出会ったらしく、一年のころに初めて家に連れて来た彼氏だ。翔真くんも私をよく可愛がってくれていて、結婚して養子になることが決まった時も喜んで受け入れてくれた。花菜ちゃんは安心したみたいに笑っていた。

「十歳のころに、養子の申請したはずですよ。五歳か六歳から花菜ちゃんとは一緒にいたんですけどね」

シュークリームを食べ終えるなり、いつものみかんゼリーに手を伸ばした。飯塚先輩は近くにあったカップのムースを取って、封を開ける。まるで事務作業のような流れ作業の食べ方に、思わず笑いそうになってしまった。

飯塚先輩は小さな声で「そうか」と一言だけ吐き出す。私は何も言わずにみかんゼリーを口に含んだ。

「養子つつつたから勘違いしたけど……いい親御さんじゃねえか」

これは、誉められた？

翔真くんや花菜ちゃんのことを誉められるのは好きだ。あの人たちは本当にいい人たちだから。何より、私を大切に育ててくれる。大きくなつた今ですら、たくさん心配して、たくさん可愛がってくれているから。

「そうでしょう？ 祖父母と両親は私の自慢です」

「それは俺じゃなくて親御さんに言つてやれ。たぶん、すげえ喜ぶはずだ」

思わず自慢気な口振りになってしまったのは、大目に見て欲しい。こんな話は、飯塚先輩だから話したこと。それを言つてよかったと思える。やはり、彼もまた優しくくて大きな存在なのだ。こういうところを、私は好きになつたんだ。

飯塚先輩は伏し目がちだったけれど、口元は笑っていたのが見えた。こうして普通に話してられるのは、果たしていつまでなのだろうか。

私が先輩に好きだと言つてしまえば、もうこんな風にはいられないのだろうか。先輩に彼女ができたりすれば、こんな時間は幻だったかのように一瞬で消え去るだろう。きっと私たちの関係は、とても曖昧で危ういもの。いつ切れてもおかしくない、細い糸で繋がれているような。

自分の気持ちを吐き出してしまふ勇氣は、まだ持ち合わせていない。きつと、勢いに任せてなら言つてしまえるのだろう。だが、そんな風に打ち明けるのはさすがに嫌だった。さすがに、今日のように

に勢いに任せた後から気まづくなってしまつのはもう勘弁して欲しい。

「花菜ちゃん、早くに結婚したんです。それ、きつと私のためで……」

養子になることは、もう結婚する前から決まっていたらしい。花菜ちゃんは快諾していたことを、元彼氏はアツサリと拒否してしまったのだ。次の日には連絡すら取らなくなっていたのは、きつと私しか知らない話だろう。

翔真くんとは付き合う前に「私、養子を取るから早く結婚したいんです」と事前に告げておいたらしい。きつとそう言えば引く男もいるから、そんなヤツはこっちからお断りよ！ と花菜ちゃんは笑っていた。

だが、肝心の翔真くんはヘラリと笑って「いいんじゃないの？ 花菜となら、結婚したってお互いに幸せに過ごせるだろうし」とこれまたアツサリした返事を返した。どうやらその返事は花菜ちゃんの意表を突いたらしく、翔真くんと一生一緒にいることを決めたのだとか。

私のため、と言いなながらも花菜ちゃんも翔真くんも幸せそう。無理をしてくれたわけじゃないことに、少なからず安心している。おまけに二人とも私を溺愛してくれているのもあってか、私も同じくらいに二人が好きだ。

まあ、翔真くんたちの問題だからそこまで飯塚先輩に話すわけにはいかないのだが。

「……なあ、お前……」

何かを言いかけた先輩が、再び口をつぐんだ。

「……やっぱり、いい」

あえて言わないのは、私のプライベートにどこまで踏み入れていか迷ってるから？

先輩は優しい人だから、そうでないとは一概に言いきれなかった。なんだかんだ言っても、しっかり人の気持ちを考えてくれている人だ。だからこそ、迷っていたのかもしれない。だから私も、何も咎めたりしない。

「あ、真山先輩も呼べばよかったですね。仲直り記念」

にや、と笑えば、あからさまに飯塚先輩が眉間にしわを寄せた。男同士だったら、仲直り記念みたいなことがないだろう。それは私にもわかっていた。

これは、今の雰囲気明るくするために持ち上げただけの話。飯塚先輩はわかっているのか、いないのか。渋い顔をしたまま、げんこつで軽く頭を叩いてきた。

「……馬鹿か。それに、セージは甘いもん食べねえよ」

知ってます、とはあえて言わないでおいた。

以前に一度だけ、手作りのお菓子をラウンジで広げたことがある。その時に、真山先輩は絶対に手を伸ばさなかった。

後から聞けば、甘いものは全般得意ではないということ。俺の分はリュウにやってくれ、と言われた。だからこそ、飯塚先輩が甘党だということはしっかりと覚えていたのだ。きつと、ガラじゃないな、と思った印象が強かったからだろう。

「食べ切れなかったら、健太や江藤くんに回しますよ」

「……あいつらは？」

あいつら、という一つの単語だけで誰か推測できるようになったのは、日頃の賜物だろうか。

「女子軍は最近ダイエットしてるから食べてくれないんです。あ、雅先輩もですよ?」

みんなスタイルいいのに口揃えてダイエット、ダイエットって。痩せなくたってもともと細いし、可愛いのに。

「お前は?」

「しませんよう。食べるの、好きですもん」

「お前は、しなくていい」

さらっと、そういうこと言わないでくれますか。その言葉にどんな意味が含まれているのかはわからないけれど、きつと何かの意味が籠められていた。想像だけど、たぶん優しい思いやりみたいなもの。そんな飯塚先輩を好きになったことを、どこか誇らしく思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7353u/>

すきでいてもいいですか

2011年10月12日14時05分発行